

を義といふ。禮とは臣は君をたつとみ、子は親に孝し、弟は兄にしたがひ老を敬ふて上にして侮らず、下としてみだりならず、是を名づけて禮といふ。又智とは、ひろく諸の文を學び、あまねく萬づの藝に達し、古を尋ね新を知る。大方三度思ひて是非分別なる、是を知るといふ。信といふは、心すなをに詞たしく、道にあらざれば行はず。善にあらざればくみせず、惣て内外かざらず勤行、誠あるを信といへり、これ皆人のしれる事ながら、常々心にかげ給ふべし。

一、人の心中にたのしみを思ふ事。其の故は井の中の蛙の水をたのしむ、大鵬といふ鳥は、一羽に千里かけるも、片鶻片平鶻とて、一二寸を飛ぶも、其時のたのしみは同事なりといふ事は、萬事不足なる人も、心をなくさむ事こそ、たのしみにて侍れと見えたり、尤も理りにや。

○莊子の逍遙
遊に出づ。
○大鵬は大き
な鳥。
○鶻は雉の子

尾籠集
父母狀并に觸書

解題

尾籠集は、周防山口に居城せし大内義隆が戦國時代の隆盛期に於て領内の長防兩國なる武士並に庶民をも教化せん爲に、かゝる實際的の個條を指摘し、一々禮讓を實踐せしめたものである。名づけて尾籠集といふは失禮無禮等なきことを教へたるに由るも、それのみならず修身處世上最も適切なる訓戒を含み、其の時代に於ける最も民衆的なる訓誡と見るべきである。

父母狀及同觸書は、南龍公德川頼宣の時代に熊野山中に父を殺せる者あつて、而も其の罪たるを自覺しない所の蒙昧状態を見て大に慨嘆する所あり、頼宣は此に於て侍臣李梅溪をして獄中に就きて其の囚人に孝經を授けしめ、三年の後漸く其の不孝の大罪を自覺せしめた。そこで始めて彼を所刑し、かくて此の訓令を下して紀和兩國を教諭せしめたといふ由來を有つてゐる。かくて有司をして更に之を戸々に徹底せしめんため、同觸書を頒布せしめたのである。

尾籠集

凡そ主親の御前に於て振舞ふべからざる條々

- 一、傍輩の非言、我身の忠を直に申す事。
- 二、追従、虚言、和議、凶害、雜言等の事。
- 三、惣て我より上の人に向て、白衣に出對の事。
- 四、人前に於て長楊枝、尻を撲つ等の事。
- 五、物知面、字讚歎、灰書の事。
- 六、問はず話、生口立の事。
- 七、人の處より來る文章披見の事。
- 八、佛神の前にて高聲經の事。
- 九、堂社の前、貴人の前を乗打つ事。
- 一〇、他人の太刀を抜き見る、付弓引く事。

○尾籠とはおかしきこと、宛字にて、失禮、無禮、不敬を意味す。

○和議、陰に人をごんげんすること、中古近古時代の語。

○字讚歎、文字通即ち學者文面して自慢すること。

- 一一、人の前に於て食巧、付食物の時物言ふ事。
- 一二、君親に向て腹立面を見する事。
- 一三、酒の座敷にて酌取る時に物言ふ事。
- 一四、主の使に行く時、私に寄て遅參する事。
- 一五、主の呼ぶ時、二聲の内に答へざる事。
- 一六、主親の後に立て言いふ、付主親の座席の傍を踏む事。
- 一七、主親に向て戯に云申、付勝負進む事。
- 一八、主より先打を仰せを蒙り、弓手の方を打通る事。
- 一九、主の前にて畏まる時、左の手を下る事。
- 二〇、主親の機嫌を知らず、物申す事。
- 二一、主の御前にて酒給ふ時、三度悦ぶ事。
- 二二、主君の内戚外戚の沙汰申す事。
- 二三、主の勘當を蒙り、近所を徘徊する事。
- 二四、道理ありと雖も、主の前にて人と鬭諍の事。

○上臈。身分
高き婦人の稱

- 二五、高官の人と對座して居る事。
- 二六、主の前に於て人を罵詈する事。
- 二七、人の處に於て上座を知らざる事。
- 二八、上臈の座に近寄る事。
- 二九、君の御前にて足音高く板踏む事。
- 三〇、貴人の口入を聞かざる事。
- 三一、貴人物語ある時、讒言の事。
- 三二、貴人の前にて高鼻、唾吐く事。
- 三三、貴人の前にて萬づ物に感ずる事。
- 三四、高官の人俄かに賤と成る事。
- 三五、聽聞の座に於て物語り、付下輩と爲り猿樂舞ふ事。
- 三六、上臈知人の前に於て經文を引く事。
- 三七、湯風呂に入る時、上座を知らざる事。
- 三八、上方、振舞に就き、富貴人を嫉妬の事。

- 三九、重罪の科人を最負ひいきの事。
四〇、過を隠すなく互に論ずる事。
四一、奉行を閣さしをきて物を取次ぐ事。
四二、自ら訴訟ある時、主に直に申す事。
四三、御前に就て女房達へ自ら訴へ申す事。
四四、奉公の功なく俸祿を訴へ申す事。
四五、執事管領を閣さしをきて振舞ふ事。
四六、役人に罪科ある人を定め置く事。
四七、喧嘩の砌りに於て虚を欲し勢を伐つ事。
四八、静謐ひそりの刻、物の沙汰を怠る事。
四九、外人の前に出て我身の俗姓をいふ事。
五〇、甲乙親より進退を賤しむ事。
五一、若き者が老者を笑ふ事。
五二、直なる人が片輪人を笑ふ事。

○番匠。大工
の事。

- 五三、智ある弟子が智なき師に教へず、輕慢する事勿れ。
五四、笛、尺八を吹くに時節を知らざる事。
五五、人の愁ある時、酒盛する事を欲す。
五六、初心者はつしんの連歌沙汰の事。
五七、衆會の座に於て私に物語する事。
五八、鞆掛りの内を通る事。
五九、弓射場に履を脱がざる事。
六〇、高より 沓脱がざる事。
六一、狩漁の處、騎打つ事。
六二、人の物問ふに寝ながら答ふる事。
六三、番匠の時、越えて木を削ける事。
六四、相撲の時、物を言ふ事。
六五、無能の人を笑ふ、付餘さいかくり才覺面を欲する事。
六六、人の失錯の時、笑ふ事。

- 六七、人前に於て衣裳を脱ぎ着る事。
- 六八、主親の前にて、子を愛する事。
- 六九、奉公に女房達を犯す事。
- 七〇、忽緒我慢を致す、付人の女性を一々見る事。
- 七一、客人の來る時、妻女物言ふ事。
- 七二、男の他行を知りながら、留守に行く事。
- 七三、我より上たる人に、盃指すべき事。
- 七四、人の運を嫌ひ指さす事。
- 七五、騒しき所に行て長居す、付祝座に於て禁句を言ふ事、
- 七六、調菜を立て併せ試むる事。
- 七七、僻事、我慢の事。
- 七八、親、嗔氣色の時、劣らず返答する事。
- 七九、人の鷹を居ゆる方を通行する事。
- 八〇、人の寄合の時に、人の上を言ふ事。

○忽緒。なをざり。

- 八一、人前にて疊の縁を踏む事。
 - 八二、起居の時に、抜入手する事。
 - 八三、人の前にて立ちながら物云ふ事。
 - 八四、人の物書く机に倚り聽く事。
 - 八五、他人の口を著る事。
 - 八六、魚を食ふ時、淨箸を汚す事。
 - 八七、無忽に戸を開け立て、付双肩て人を手會に云ふ事。
 - 八八、出仕の時、下人を悪く云ふ事。
 - 八九、身分なくして人を嘲り咲ふ事。
 - 九〇、人前にて枝柱に施す事。
 - 九一、案内を知らざる人の家に與風行ふ事。
 - 九二、人の門前にて立聞を欲する事。
- 右の條々の掟、防州大内殿領中に於て壁書也。
かくの如く、後世の爲に寫し置き候事。

父母狀觸書

○科は罪科を
さぶ。

科仕候へば、迷惑に及ぶ儀は、誰も存ずる事に候へば、たくみて科は仕らざる者にて候へ共、心ならず科出来る事之あり候、其科の出来ざる様に致し様之あり候間、教へ申すべく候、相守り候へば、科出来ざる事に候と申し候て御箇條を読み聞かせ、此趣を相守り候へば、科出来ず候。

一、父母に孝行の事

孝行に仕り候へば、上の仰せ出されにあひ申し候とて、輕薄の孝行、却て不孝の悪人なり、此色々之あり、眞實の孝行は二つとなし。

一、法度を守る事

御法度を相守り、背かず候へば、科出来申すべき儀之れなし。

一、謙り奢らざる事

百姓は其分限程に身を持ち、我が目下の者なりともあなどらず、たとへ手前

宜しき者たりとも、花麗なる儀を仕らず、百姓の作法等心得、上を敬し申す所、第一に存じ候へば、科のかゝるべき處之なし。

一、面々の家職を勤め、正直を本とする事

面々の家職を忘れず能く勤め候へば、我身の爲め、百姓は耕作の徳之あり、上よりの御褒美にあひ候て、世におそろしきもの之なきに付、安全にくらし科も出来ず候。何も正直をさへ本とすれば、右の箇條は背かず、我と本理に叶ふなり。右の箇條を人見せに相守り、偽り之ありては、則ちはや科に成る間萬事正直に、我も人も心得眞實なれば、其理に叶ひ、我も人も安全に世を送り、科も出来ず、子孫まで長久なり。

右の仰せ出され、一年切りの事にては之なく、永々までの儀に候へば、御代官、郡奉行は幾度もかはり、此度承りたる士民は死失せ候ても、右の理は孫々に傳へ滅びず候間、末々の者迄も、右の道理を得心候やうに教へ申すべき事、唯だ大かたに仕り候ては、通じ申すまじく候間、骨を折り怠らず申し聞かすべきなり。能く得心致し候はゞ、郡奉行の目違ひにても、是程の免合

○御代官、郡
奉行共に舊幕
時代の地方官

能く候とて、郡奉行定め候免より、高免に申出る程の風俗に仕り候はねば、仰せ出されの處に相叶はずと存じ候程に、常々心得、精を出し、數年に教へ申すべし。郡奉行何様に教へ候て、百姓に尋ね候節、庄屋年寄に尋ね候はゞ、教の通り挨拶仕るべく候へ共、右様のものには尋ねずして、末の軽く思ひ寄りもなき者に相尋ぬべき時、不都合なる儀を申し候はゞ、郡奉行教へ之なきに成るべき間、左様の末々の者までも、一等に得心いたし候様、教へきかすべき事なり。郡奉行教へ候如くに、末々にても相心得候へば、郡奉行手柄御奉公と思召さるべく候間、左様に相心得べく候。末々の百姓は虫も同前の者、聞入れも之なきに付、教へ候ても其甲斐之なきなどと、上への申分は立ちがたく候。以上。

五常名義

五倫名義

六諭衍義大意

解題

五。常。名。義。は小冊子にて、幕府有名の儒者鳩巢室直清が八代將軍吉宗の命を奉じ、享保三年九月撰進し、幾くもなく上梓して廣く世上に頒布せられたものである。蓋し士庶徳化の必要が人文進歩の趨勢より江戸幕府の中葉に生じて、名君の稱ある八代將軍をして自然此の舉に出でしめたもので、以て當時の社會状態を察知すべきである。

五。倫。名。義。はこれ亦小冊子にて、同じく鳩巢が吉宗公の命を奉じて、享保三年十月、五常名義に引續いて撰進したものである。五常とは仁義禮智信で、五倫とは父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信をいひ、皆吾人修身處世上の必要條件ならぬはない。それを一般無學の民衆にも通曉し易からしめん爲に、此の述作あるに至つたもので、以て當時の幕政の大に社會徳化に勉めたことを了知すべきである。後以上の二書を合本して五常五倫名義と題せる一冊とし、讀書兼習字本として家庭に廣く使用せしめたものも世に出てゐる。

六。諭。衍。義。大。意。は、六諭衍義は清朝康熙帝の勅諭を蠡城の范宏が衍義して世に公けにした

もので、それが琉球に傳はり、程順則なる人が同國に刊行したのを、八代將軍時代に我國に傳へたから、將軍は乃ち室鳩巢に命じ、五常五倫の名義に引續き、之を平易なる國語に譯して撰進せしめ、幾くもなく廣く世に行はしめたものである。六論とは孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、母作非爲の六ヶ條であつて、要するに一般民衆をして、知足安分して國土に安んじ其の生業を勤めしめんと期したものである。それが社會徳化の上に最も適切なる書と認められて、我國にては先づ荻生徂徠をして其の衍義本に訓點せしめ、更に鳩巢をして、邦語に譯して一般家庭の讀本たらしめたものである。享保七年の刊行に係り、世に之を賜版と稱し、書肆に版木を與へて普く流布せしめたといふ。以て當時當局者の深意のありし所を察すべきである。

五常名義

癸卯秋九月、教を奉じて撰進し、冬十月に至り、又命ぜられて其の末に跋す。

仁

天に元亨利貞とて、四季にめぐりて四の徳あり。徳とは天に備りたる道理なり。其の道理人にそなはれば、仁義禮智となる。仁は天に在て、春にあつて元と名づく。陽氣の發生する道理なり。發生とは萬物をめぐみて、生じ出すといふも、道理を人々うけて仁とする故、溫和慈愛とて、春の氣の溫和なるごとくにして、人をいたみあはれむ心あり。人として不仁なれば、さながら木石にひとし。然ば仁は心の潤ひにして、人をめぐみ、物をそこなはず、常に道理に感じてはかならず忍びあへざる心有を仁といふべし。

○元亨利貞、易經の乾卦に此語あり、言傳に元は善の長なり、亨は嘉の會なり、利は義の和なり、貞は貞の事なり、君子の四徳とす。

義

○肅殺。秋氣の物をそこなひ枯すをいふ。

五常名義

天に在ては、秋にあたつて利と名く。陰氣の肅殺する心なり。肅殺は草木の葉を落し實をむすび、萬物をからし堅むる事なり。其道理を人々受て義とする故に、裁制斷割とて、衣をさきわくるやうに、道理よろしく、きりわくる心あり。譬へば刀に刃金のあるごとく、義は心のきれものにて、一毛も受けまじきものをばうけず、一言もいふまじき事はいはず、生べきときは生き、死すべきときは死し、すべて物を決斷して、すこしも筋をたがへざるを義といふべし。

禮

天にあつては、夏にあたつて亨となづく、湯氣の長養する道理なり。長養とは萬物を長じそだて、あざやかに盛んなる事也。其道理を人々受て利とする故に、恭敬辭讓してうやまひつゝしみ、物を辭退し讓る心あり、其あらはれたる所にていはゞ、衣冠正しく威儀みださず、上を尊み下をあなどらず、人を先だて、己を後とす。其外身に行ふところ、何事によらず其程にあたり、少も自由がましく、さしてゑたるふるまいなく、または疎略にして、緩怠なる事なきを

○緩怠。おこたりなまける俗にいふ無禮

禮といふべし。

智

天にありては、冬にあたつて貞となづく、陰氣の閉藏する道理なり。閉藏とは草木も根にかへり、蟲虻も穴ごもり、すべて萬物をとぢ治る事なり。その道理を人々うけて智とする故に、是非を分別する心あり。人ごとにその心淺く、さわがしく氣高ぶるによつて、その見付所定まる事なし。されば冬の氣の地下にふかく潜まりて、春のさざしを待ごとく、常に靜なる内に根に入て、物を簡辨する心あれば、物にむかふ時にあたりて、自らは是非に迷ざるを、智といふべし。

○簡辨。えらびわきまふ。

信

天に有ては、土旺にあたりて、定りたる名目なし。土旺は世俗にいふ土用の事なり。されば四季とも土用あるごとく、仁義禮智すべて信に離れず。但仁義禮智の外、信の道理とてあるにあらず、たゞ仁義禮智いづれも眞實なるといふ事を示して信となづく、たとへば水のひやゝかに、火のあつきに偽なきがごと

○土旺。土中の氣盛んなるをいふ、故に土用中は暖かし。

く君につかへ父母につかふるより、其外、身に行ひ人に交るにいたるまで、心信實にして、内私を挾まず、外に飾るを事とせず、ひとへに道理の一筋を守りて、始終變ぜざるを信といふべし。

○湛然。水の
ジツとしてた
びよふ貌。
○脈理井然。
すじみちが正
しくとほる。
○概乎。あら
かた、即ちボ
ンヤリとして
○逆施行。即
ち反対となる
意。

右五常名義は旨を奉じて撰進する所なり。夫れ五常は人心に具ふる所の性、天下の大本なり。其の中に在るに方つては、一源湛然として波及せずと雖も、其の物に感ずれば則ち脈理井然として紊れず。但だ世を擧げて、皆習ふて察せず、行ふて著れず、武人俗吏と雖も、口を開けば輒ち仁義禮智を説くも、而も名義の粗に至つては、猶ほ且つ概乎として聞ゆなるし。宜べなり其の逆施行して覺るなきや。今、國字を以て其の義を疏し、述べて數語となし、之を掲げ示す。其れ或は此に察するあらんか。幼學の徒の若きは、又此を以て習字の帳に代へ、晨夕誦誦し、手翫び、耳熟せば、庶幾くば、良心を開發し以て養正の功を助けん。亦古人小學の意なり。(元漢文)

享保癸卯仲冬望日

臣 室直清謹跋

五倫名義

癸卯冬十月、教を奉じて撰進す、十一月に至り又命ぜられて其の末に跋す。

父子有親

天下にあらゆる人の品を、五に別て五倫といひ、その上に各教を附けて五教ともいふなり。其内父母の子を生ずるは、天地の萬物を生ずる道理より出て父母の倫を定むるなり。さて其の教をたて、父には慈といひ子には孝といふもつとも父をいへば、母もその内にありと知るべし。然るに父母たるもの、子を愛するとならば、必ず教戒あるべし。もし目前の愛におぼれて、子不義に陥らしむる、是れ禽犢の愛とて鳥獸の子を愛するにて、誠の愛にあらず、また子たるものも、衣食の養ひ、朝夕の勤はいふにおよばず、すべて身を慎みて父母の志に背かざるやうにすべし。然らざればまことの孝にあらず。但だ其の簡要

○倫は筋道、
道理、人倫と
いふ。倫理をい
ふ。

○犢は子牛、
牛の子牛をね
ぶりと愛するこ
どく愛に溺る
ゝをいふ。

をいふに、父子は同氣一體のものなれば、たがひに毛頭もへだてなく、兎角に天性のしたしみを失はざるを本とすべし。然る故に、聖人、父子の間において親の一字を不易の法と定め給ふ。所謂父子有親といふ一句は、ながく父子の掟たるべし。

君臣有義

君臣上下の道は、天は上に位し、地は下に位する道理より起れり。人に上下の分なければ、人道も立たず、故に君臣の倫を定むるなり。さて其教へをたて、君には仁といひ、臣には忠といふ。君の仁といふは、もとより人をあはれむ事なれども、一通りの慈悲とのみ意得べからず。たゞ私なくして、あまねく下を利益するをいふなり。又臣の忠といふは、日夜勤勞するをのみいふにあらず、たゞ眞實を以て君につかへ、すべて奉公に表裏なく、己をつくすをいふ也。其簡要は、君臣たがひに義を本意とすべし。義は道理の曲尺をいふなり。君も此曲尺を以て臣を使ふべし。上の威勢にまかせて、此かねを破るべからず、臣

も此かねを以て君につかふまつるべし。己れ追従によりて此かねを枉ぐべからず、然る故に、聖人、君臣の間において、義の一字を不易の法とさだめ給ふ。所謂君臣に義ありといふ一句は、長く君臣の掟たるべし。

夫婦有別

天に陰陽あれば人に夫婦あり。陰陽和合して萬物を生育す。天人一理と知るべし。然るに陰陽は倡隨して、陽はさきだつて陰を倡ひ、陰はおくれて陽に隨ふ。是又自然の理なり。其理によつて夫婦の倫を定むるなり。されば夫は別正とて、つよく正しき徳を以て、常に婦をいざなひ、假りにも容色にまよふ事なし。婦は貞靜にて、一筋に靜なる徳を以て、常に夫に隨ひ、いささか寵愛にほこる事あるべからず、但その簡要をいはず、夫婦は和らぎ睦しき中に、男女の差別あるを本意とすべし。男は外をおさめ、内さまの掟を好まず、女は表向の事をいろはず、たゞ内外の差別みだりならざるをよしとす。然る故に、聖人、夫婦の間においては、別の一字を不易の法と定め給ふ。所謂夫婦に別ありとい

○貞靜。たゞしくしづか。

ふ一句は長く夫婦の掟たるべし。

長幼有序

父母ありて子を生ずれば、先に生ずるを長とし、後生るゝを幼とす。兄弟といふも同事なるべし。元來、兄弟は、父母の遺體をわけて大切なるものなり。是によつて長幼の倫を定め置きて、兄は弟を愛し、弟は兄をうやまふを道とす。殊に父母死して後は、父母のかたみとも見るべきは兄弟なり。常に形にかけのはなれざるが如く、思ひかはして、互に疎略にすべからず。但簡要をいはゞ、兄弟は天倫とて、始めて生るゝより、天然定まりたる次第なれば、假りにも此次第は亂るべからず、譬へば寵愛の子たりとも、同腹の兄をさしをきて、家督を傳ふべからず。何ほど才智ある弟にても、兄に先だつ事あるべからず、此次第正しからずしては、一家の禍とも成るべし。然る故に、聖人、長幼の間に於て、序の一字を不易の法と定め給ふ。序は順序とて次第の事なり。所謂長幼有序いふ一句は、長く長幼の掟たるべし。

朋友有信

天下の人は同じく天地の氣を受けて生ずれば、朋友として交るべき道理なり。是に依て朋友の倫をたて置きて、仁をたすけて善を責むるを朋友の道とす。仁は己が行ひに私なき事なり。仁を輔くるとは、己が修業に怠りあれば、朋友の相輔くるに仁にすゝむをいふ。善を責むるとは、物を催促するごとく、たがひに善を勉め勵ますをいふ。正しく直なる人、または物知る人に交るをば益友とし、柔にして偽る人、または巧みに輕薄なる人に交るを損友とす。然れば益友を求め損友を遠ざけ、幾度も禮儀正しく、懇慫にして相交るべし、但その簡要をいはゞ、朋友は親疎ともに物をいひかはし、事を頼みあふものなれば、第一眞信にして相欺かざるを本意とすべし。しかる故に、聖人、朋友の間に於いて信の一字を不易の法と定め給ふ、所謂朋友有信といふ一句は、長く朋友の掟たるべし。

よび、賤の男しづの女までも、常によむにたよりよきやうにとの意なるべし。今爰に其あらましを、同じく和語にうつして、世にもしらしめ、且は序ともみよとて、享保七年壬寅のとし、二月の季、室直清これをしるすことしかり。

六諭衍義大意

孝順父母

凡そ世間にある人、貴となく賤となく、父母のうまざる人やある。されば父母は我身の出来し本なれば、本をば忘るまじき事なり。況や養育の恩、山よりもたかく、海よりもふかし、いかゞして忘るべき。今孝心に本づからんとならば、父母の恩をよく／＼おもふべし。先十月の間、懐胎くわいたいにありしより、母をくるしむ。さて生れ出て、幼稚のほどは、父母ともに晝夜、艱難辛苦をいはず常にあらし風をもいとひて抱きそだて少も病有て煩はしければ、神に祈り醫をもとめ、我身もかはり度ほどに思ひ、たゞ子の息災にして、成長するを待より外は、何の願かある。其子稍長おとなしくなれば、其ために師を撰えらび藝をならせ、よき人にもなれかしと思ひ、家をもおさむるほどになれば、縁をもとめ婦をむかへて、さかゆく末をこひねがふ。又世に立まじはるをみては、或は悪き友に

○懐胎。母の体内。

もひかれ、或は不慮の難にもあはんかと、いまだ目にみえぬ事までも、たえず心ぐるしくおもふほどに、すべて一生のいとなみ、何事か子のためにせぬ事やある。何れの時か子をおもはぬ時やある。是等の厚恩、たとひ報じつくさずとも、責て孝行にして養ふべき事なり。其孝行といふは、貧富貴賤はあつから不同あれば、必しも父母の衣食を結構にせよといふにもあらず、たと分限相應に、父母の飽煖なるやうにすべし。父母年たけて後は、大かた側をはなれず、出入には手をひき、うしろをかへ、寢興には夜はしづめ、朝は省るべし。父母若し病あらば、晝夜、帶をとかず、他事をすて、看病し、醫藥の事にのみ心を盡すべし。さて第一に意得べき事は、いかほど父母の身を孝養すとも、其心を安ぜずしては、大なる不孝といふべし。何事も父母の教訓にたがはず、世法をおもんじ、よく身を守り、家をたもつべし。其子のかくのごとくなるをみては、父母の心中、いかほどの安堵、いかほどのよろこびとかしる。是を父母の志を養ふと云なり。たと常におもふべし、おしむべきは父母存生の日なる事を今此時に及び孝養をいたさずば、父母死して後、いかに悔ともかへるべきや、

口反哺。哺は
口中にある食
物を、これら
すとは子が親
に養はせられ
長じて其の恩
を反すをいふ
禽とある。鳥
哺とある。鳥
反

たとひ山海の珍物をそなへて手向參るとも、いける時の蔬菜にはおとるべし。いかなれば今の世の人、父母の養を大切の事におもはざるや、最愛の妻子たりといふとも、妻子は失て又も得べし、たと一たび失てふたゝび得べからざる物は父母なり。人の子たる者、是をおもはば、いかて孝心を起さざるべき。今の世、やゝ孝心ありとみゆる人も、大かた妻をめとり、子をもてる身になれば、眼前妻子の愛にひかれて、おのづから朝夕の勤さへおこたるを、くやしとだにも思はず、それによからぬ妻子にあへば、いつとなく父母の悪き事をいふほどに、其言葉耳に入り心につもれば、己も父母をうとむ心になりぬること、いふもあさましき事なれ。能おもひみよ、我身十四五歳までは、妻と云ものもなし子といふ者もなし。此時我を養育せし人はなに人ぞや、我を介抱せし人は何人ぞや。然るに父母にかへて、妻子をおもふ子やあるべき。鳥の鳥さへ反哺として親にくゝめ反すといふ事あり。人として不孝なるは、人たる本心たえはて、禽獸にもおとりたるといふべし。ふかくおそるべき事なり。

詩曰

我勸世人孝父母、父母之恩爾知否、
 懷胎十月苦難言、乳哺三年未釋手、
 每逢疾病更關心、教讀成人求配偶、
 豈徒生我愛劬勞、終身爲我忙奔走、
 子欲養時親不在、欲報罔極空回首、
 莫教風木淚沾襟、我勸世人孝父母、

右譯

我れ世人に勸む父母に孝なれと、父母の恩爾おんぢ知るや否や、懷胎十月苦み言
 ひ難し、乳哺三年未だ手を釋すてず、疾病に逢ふ毎に更に心に關かく。教へ讀ま
 しめて人と成し配偶を求む、豈に徒我を生みて愛に劬勞くわうらうするのみならん。身
 を終るまで我が爲に忙しく奔走す。子養はんと欲する時親在さず、報いんと
 欲して極まりなし空しく首を回らすことを、風木の涙をして襟うすだを沾ぬはしむる
 ことなかれ。我れ世人に勸む父母に孝なれと。

○乳哺。ちちをふくませ養ふ。
 ○風木。木静かならんと欲して風止まらず、子養はんと欲すれば親おんに基もとづく。
 ○故。事ことに基もとづく。

尊敬長上

古より今に至るまで、かくばかり大なる世界、かくばかりおほき人民なれども、たゞ一つの禮義によりてさだまると知るべし。いかなるがこれ禮義ぞといへば、主従上下の差別をたて、としたかなる人と、若き人との次第をみだらぬ事なり。就中、主従は重き事なれども、主人に對して無禮なるは、世上にゆゑさぬ事故に、末々までも主従の間は、をのづから禮義を存するぞかし。されば主人を尊敬するは、人のみなしる事なれば、今更爰にいふに及ばず、是によりて父母に孝行するにさし次で、長上を尊敬するを第二の教とす、長上といふは我より年たけ又は位たかく、わが上にある人をいふなり。まづ一家にていはば男女をいはず、わが親方なる人は、これ皆長上なり、但し長上を尊敬する道はわが親しき兄より始まるべし。そのかみ我より先に生れて、遂には父に代る人なれば、父母に次で敬ふべきは、わが兄にあらずや。たとひ父死して別宅に居るとも、常に本家をおもんずべし。家財を配分する事相違ありとも、全く兄の

裁判にしたがふべし。是等の出入によりて、兄弟のしたしみを失ふべからず。若し兄よからずして、我に非道を加ふるとも、始終弟たる道を盡して、兄とがむべからず。その外父方母方ともに、一族のうち年たかき人をば、それ〴〵に禮義を盡してねんごろにすべし。いさゝか無禮をいたすべからず、いかなれば今の世の人、親族の思ふすくして、長上を尊敬する事をしらざるや、或は妻子の語にまよひ、或は貨財の欲にひかれて、やゝもすれば不和になり、はては兄弟親族たがひに争ひにも及べば、天性骨肉のしたしみも忽ち變じて仇敵のごとし。いとあさましき事なり。又他人にていはゞ、其年齢わが父と同輩なる人をば、父に準じて敬ふべし。わが兄と同輩なる人をば、兄に準じて敬ふべし。孔子郷村におはしまして、一族の出合には、身を引さげて、たゞつゝしみたまふとなり、聖人さへかくのごとし、況や常體つねていの人、すこしも驕りあなどりたるふるまひあるべからず、坐するときは下に坐し、行く時は跡より行くべし。假かり初そもにも長上をさしこゆる事あるべからず。長上の前にて、口にまかせて空言そらごとし興に乗じて戯れ事するは、はなはだ無禮なる事なり。ふかく是をいましむべし。

又長上の中にて、その行ひ正しく、人の鏡ともなる人はいふに及ばず、其外藝能ありて、人の師匠にもなる人をば、別して是を敬ふべし。又我より位たかき人はたとひ年弱にして材徳なしといふとも、すでにわが上にたつ人なれば、これまた長上なり。常に禮義を存して、あなどるころあるべからず、さればいにしへより高位なる人、賢徳ある人、老年なる人、これを三つに達尊して、天下におしわたつて敬ふべき人とするなり。後の世に至りて、時勢につきて、くらゐたかき人をのみたつとんで、老をうやまひ徳を敬ふ事をしらず、ふかくなげくべき事なり。

詩 曰

我勸世人敬長上、 身先尊敬爲榜樣、
 後船眼卽照前船、 簷前滴水毫不爽、
 分定尊卑豈可踰、 齒居先後勿宣亢、
 逆理犯上刻難容、 徐行後長時當講、
 傲爲凶德自招罪、 温良恭讓人盡仰、

滿則招捐謙則益、我勸世人敬長上。

右譯

○榜樣。めじ
るし即ち手本

我れ世人に勸む長上を敬へと、身先づ尊敬して榜樣を爲せば、後船の眼は即ち前船を照らし、簷前の滴水は毫も爽はず、分定まれる尊卑は豈に踰ゆべけん。齒先後に居れば宜しく充ぶるべきなけれ。理に逆ひ、上を犯すは刻も容れ難し、徐行して長に後れる時、常に講ずべし。傲つて凶徳を爲せば自ら罪を招く、温良恭讓人盡く仰ぐ、滿は則ち損を招き謙は則ち益す。我は世人に勸む長上を敬へと。

和睦郷里

凡そ都鄙を論ぜず、同じ郷村に住居する人は先祖以來常に行きかよひ、互に久しく馴習ぬれば、其筋目尤も忘るべからず、たとへば他國にありて、我故郷の人にあはゞ、いとなつかしく、親族の思ひを爲すべし。是にて同じ郷村の人は常に疎略にすべからざる事を知るべし。いかなれば今の世の人、一旦のいか

り又はわづかの欲によりて、日ごろのよしみを忘るゝにや、尤も歎はしき事なり。或は田宅の界を争ひ、或は金銀の債をはたりて、双方いかりをおこし、遂には公事訴訟にも及ぶほどに一郷のさわぎともなるぞかし。その始をたづぬるに、我身に最負する心よりおこりて、常に己を是として人を非とし、己が利をのみしりて人の害をかへりみず、元より我身のためをおもふは、人ごとと同じ心なり。然るに人としてなさをしらぬは、木石に同じ、何事も人の上を思ひはかりて、我身ひとつを先だつべからず、たゞ我も人もよきやうにと心得べし。しからばなどか和睦せざらむ。但し大學にも家を出てずして教を國になすとあれば先づ我一家のむつまじきを本とすべし。父母に孝行し、長上にしたがふ道は、前に論ずれば今又いふに及ばず、次には夫婦の道を重しとす。古より妻を去ると去らざるとに大法あり。婦人淫亂なるか、舅姑につかへざるか又嫉妬ふかく、もの盗みなどすれば、法において去るべし。然れども其妻、親の家なくして歸すべき所なきか我と年ごろ父母の喪とともにするか又は前には貧賤にして、後には富貴なれば、大なる不義の外は法に外於て去るべからず、今の世を見

るに或は其妻に愛着して常に悪行あるをもしらず、或はその妻にさせる事なきに、多年の馴習を忘れて、よしなく離別するもあり。何れもいにしへの法にたがひて、家のちさまらざるといふべし。又在家の人に父死して父の妻を妻とするものあり、人倫をみだり常法をやぶるといふべし。その外ちかき親類の後家を妻とする事、何れも有りまじき事なり。凡そ郷村にある人は、先づ是等の不義を相互に吟味すべし。さて相まじはるの道をはば、常によるこび弔をのべ、やみわづらひを問ふは定まりたる事といひながら、尤も禮義を盡し、眞實の志を致すべし。水火盜賊不慮の難あらば、互に合力して随分救援すべし。行跡の悪き人をば、幾度も懇に諫むべし。賢徳ある人をば敬ひ、學問ある人をば親しみ、材藝ある人をば、ほめあらはし、無能なる人をば教へ誘き、争ひに及ぶものをば取りあつかひ、愁にしづむ人をばとひ慰め、孤兒・寡婦・老病かたわなる人をばいたみあはれみ、困窮無力の人をば賑はし濟ふべし。しからは一郷の人ちもひ合ひて一家の親しみに同じからん。いかて和睦せざる事やあるべき。

詩曰

○仁里。人情の美しき里をいふ、論語に里仁爲美あり。○祥。致す。目出たいよと。○告狀。告訴すること。

我勸世人睦郷里、 仁里原從和睦始、
須知海内皆弟兄、 安得隣居分彼此、
從來和氣能致祥、 自古鄉情稱美水、
東家有粟宜相賙、 西家有勢勿輕使、
偶逢患難必扶持、 若遇告狀相勸止、
同郷共井如至親、 我勸世人睦郷里、

右譯

我は世人に勸む、郷里を睦しくせよと、仁里は原と和睦より始まる。須らく知るべし海内皆弟兄たることを、安んぞ隣居して彼此を分つことを得ん、從來和氣能く祥を致す、古へより郷情美水と稱す。東家粟あれば宜しく相賙はすべし西家勢あるも輕しく使ふこと勿れ。偶々患難に逢ふて必ず扶持せよ。若し告狀に遇はゞ相勸止せよ、郷を同らし井を共にして至親の如し。我は世人に勸む、郷里を睦しくせよと。

教訓子孫

凡そ在家には、子孫を重しとす。子孫人がらよければ家もおこり、人がらあしければ家も衰ふ。これみな人のしる事なれば、大家小家ともに、誰か子孫のよきをねがはざるべき。然るに子孫生れながらにして、よきはまれなり。必ず教訓によるべし。其教訓の法は、幼稚の時より第一に父兄につかへ、尊とく年たけたる者をば敬ふ道をしらしめ、さて言語は偽なきやうにといませしめ、起居は必ずしづかなるやうにといませしめ、事をつとむるには、怠らぬやうにいませしめ、人にまじはるには、無禮なきやうにといませしむべし。朝夕出入には、常に心を付けて、みだりに他行たぎやうをゆるすべからず。飲食衣服をば、常に驕を制して、自由に過分をなさしむべからず。勿論一切無益の翫あそびび物をすき好みて、日を費す事あらむべからず、古へより朱に近づけば赤く、すみに近づけば黒しといへり。假にも遊女・博奕の場にあそばしむべからず。輕薄浮氣の輩にまじはらしむべからず。常に學問をさせて、聖賢の道をしらしむべし。然らば其子の生

質によりて、後日に徳をつみ、名をあらはして、世にも用ひらるゝほどにもなり、又はそれほどに至らずとも、身を守り家をたもつこと、などかなかるべきさて女子は、縫針の事を教るはいふに及ばず、たゞ平生柔和を本として、何事も穩便に貞信なるやうにと教訓すべし。然らば成長の後、人の家の婦よめになるとも、舅姑につかへ夫にしたがひ下部しもべの女までもなつけて、家内を和らげとへの、ながく繁昌の福ともなりぬべし。近代以來父祖たる者、教訓の法をしらず、其子孫をそだつるを見るに、たゞ眼前の愛に溺れて、一切の飲食・衣服・言語・舉動まで、小兒の氣隨にするをよしとす。是によりて子孫たるもの、幼少より一言のよき話をさかず、一毛の好事を見ず、その習はし癖となれば、放逸のみ好みて、假にも禮義の正しき事をしらず、たゞ學文をすゝむといへども、人たる道を教へんとはせずして、たゞ是を以て名利なかりの媒とする故に、其子孫たとへ學文すといふとも、道理において何をか自得すべき。我身の行ひにおいて、何の益かあらん。さるほどに或は貨財を貪り、或は酒色に耽り、おほく惡名をとり、身を持つづして、父母にも難儀を懸るぞかし。又女子も家にあるときに、

教訓の法なく、氣隨にそだつ故に、すてに人に嫁しても、家を治むる事かなはずして、追出さるゝ者も世にそのためし多し。是れ必ずしも子孫のとがにもあらず、そのかみ教訓の法たがふが故なり。しかれば、親の慈悲にもそむくにあらずや、孔子も子を愛せば、苦勞をさせよと宣へり、尤もさもあるべきなり。

詩曰

我勸世人訓子孫、子孫成敗關家門、

良玉不琢不成器、若還驕養是病根、

寢坐視聽胎有教、箕裘弓冶武當繩、

黃金萬兩有時盡、詩書一卷可常存、

養子不教父之過、愛而勿勞豈是恩、

世間不肖因姑息、我勸世人訓子孫、

右譯

我は世人に勸む、子孫を訓へよと、子孫の成敗は家門に關はる。良玉も琢かざれば器を成さず、若し過つて驕り養へば、是れ病根、寢坐視聽胎に教あり、

○寢坐視聽。ねたり、すわたり、きいたり、即ち平生。

○箕裘。父祖の業をつぐこと。禮記に、良治の子、必ず裘をつくること、を學ぶ、良弓の子、必ず矢をつくること、を學ぶ、此れ即ち箕裘の治の熟語の所なり。○繩に當る。○ヤンと會つてゐる。

各安生理

箕裘弓冶武と繩に當る。黄金萬兩は時あつて盡く。詩書一卷常に存すべし。子を養ふて教へざるは父の過ちなり、愛して勞するなきは豈に是れ恩ならんや。世間不肖姑息に因る。我は世人に勸む子孫を訓へよと。

天地の間に生るゝほどの人、貴賤貧富を論ずる事なく、人々我にあたりたる所作あり、是れわが生涯につきて定まりたる道理なる故に、生理と名づく。此生理に落つきて、外をもとめざるを各生理をやすんずるといふなり。然るに人の品をわかちていは、先づ士たる者は、學文をし、武藝をたしなみ、義理を忘れず、公役をつとむ。是れ士の生理なり。次に農人は耕作をつとめて、おほやけの年貢をかゝさず、職人は家藝を精しくして、所傳の習を失はず、商人は賣買をいとなみて、非分の利をもとめず、すべて此四つの民ともに、各志をかぶらずして、我に當りたる職分をつとめば、をのづから家に當りたる衣食あつて、一生安穩にしてくらすべし。其外定りたる産業なくして、負擔日儲など

○負擔。荷物をかつかうこと

して、世をわたるものあり。いやしき諺にも、天より食物なき人をば生ぜずといへば、是等の人に、おこたる間なくかせぎだにせば、我に當りたる衣食などかなかるべき。又女人にも生理あり、古へは國主の後さへ、手づから蠶繰りて衣服を作るといへり。況やそれより以下の人、いさゝかもおこたるべからず、凡そ在家の婦女は、華麗をこのまず、遊戯を樂しまず、常に機織り物縫ふわざを勤め、はやくおき、おそく寝て、辛苦をみづからすべし。是れ女の生理なり、たゞ嘆くべきは、世上の人、男女ともに、幼少より氣隨にそだつ故に、年長じて後も、たるみおこたりて、我に當りたる職分の事をば心におかず、たゞ目前の樂みに、むなしく日をちくる者多し。就中富貴の家に生るゝ人は、曾て艱難を経ず、常におほくの所從にかしづかれ、美服身にまとい厚味口にあく、いつまでもかはるまじとこそおもふらめど、一旦時移り勢ひ去りぬれば、過ぎにし富貴は一宵の夢となりぬ。日ごろ飽煖にくらして、何の材藝もなく、世話にさへうとければ、漸々に落ぶれて、庶民に下るも、むかしより其のためしなきにあらず。また身もと輕き人の遊樂を好むこそ、一しほうてそけれ。或は遊女に

よ。一宵。ひと

たはぶれ、或は博奕を好み、酒にひたり、色に溺れ、晝夜家業をすて、うかれ遊ぶほどに、はては家財もつきて、朝夕のいとなみもすべきやうなれば、おもひの外に惡事をたくみ出して、災難にあふも有るぞかし。また遊樂を好むにはあらねども、わが職分の事を一筋に守る心なく、他人のしあはせを羨み、非分の事をのみ願ふ人あり、いろ／＼思慮をめぐらすといへども、畢竟とりしめたる心なければ、遂も一事もなしあふせたる事なし。是等は名利の心より、あき足の事をしらぬ故なるべし。元より貧富貴賤は天命定まりてあれば、いかで人の力にてあらそふべき、たゞ我に當りたる職分を勤め、日に好事を行ふて、今よりゆくさきをとふべからず、萬町の田をもちても、日に食するは三度に過ぎず、千間の厦に住みても、夜の眠は八尺に止まるとあれば、常に我に事たるやうを知て、外をもとむる心あるべからず、しからば、などか生理をやすんずる事なかるべき。

詩 曰

我勸世人安生理、

素位而行稱君子、

榮枯得失命安排、士農工商業莫徒、

妄想心高百無成、厭常喜新沒終始、

藝多不精不養身、遊手好閑窮到底、

皇天不負苦心人、須知安分能守己、

更知微幸斷難行、我勸世人安生理、

右譯

○安排。ほどよくならべること。
○微幸。幸福をもとめる。僥倖を希ふこと。

我は世人に勸む生理を安んぜよと、位に素して行ふを君子と稱す。榮枯得失は命安排す、士農工商業徒にするなかれ。妄想心高きも百も成ることなし、常を厭ひ新を喜ぶも終始なし。藝多きも精しからざれば身を養はず、手を遊ばし閑を好まば到底窮す。皇天苦心の人に負かず、須らく知るべし分に安んじて能く己れを守ることを、更に知る微幸の斷じて行ひ難きことを、我は世人に勸む生理を安んぜよと。

毋作非爲

天下にあらゆる事ども、窮まりなしといへども、すべて是非のふたつに過ぐべからず。道理にしたがふを是とし、道理に背くを非とす。されば非がごとをするを非爲といふなり。今其品を擧げていふに、惡逆強盜、人をころし、火を付るやうなる事は云ふに及ばず、遊女に溺れ、博奕をたのしみ、醉狂をし、喧嘩を好み、私曲をかまへ、貨財を貪る、是等はみな大なる非爲といふべし、其起りは、一念の上よりふと覺悟を誤まりて、おぼえず大惡にも至る故に、世に法を犯し罪に陥る人もあり。身をほろぼし家を破る人もあり、その時に至りて、さこそ後悔すらめども、我となしたる事にて我と受けたる禍なれば、誰をかうらみ、誰をかとがめん。然るに前車の覆へるをみても、惡を荷擔する心より、曾て後車のいましめをしらず、世の諺にも、蓼の虫は蓼にて死し、川たちは川にてはつるといへり。あしき事をして畢竟あしからぬ事やあるべき。たま／＼幸にして禍をのがるといふとも、何ぞ頼むに足らん。其外世には、材智もあり器量もある人多し、然れども或は邪智によりて事をたくみ、人を欺き、或は血氣に乗じて禮を亂り法をやぶる、其所行を考ふるに、おほくは非爲の事にあ

○荷擔。同意すること。

らざるはなし。又生質柔弱なる人は、平生怠りて月日を送るほどに、たゞく日頃の非をさとれども、多年あやまり來れば、今より改め悔ゆとも、事のやうにたつまじとて、うち捨てぬる人もあり。大なる非が事といふべし。我れ人聖賢にあらねば、誰か過ちなからむ、たゞ一念發揮して己が非をあらたむれば、今日よりしてよき人となる。たとへば道にふみ迷ふ人の、一たび足を轉して引返せば、本道に出るが如し。又世に人倫の道をちろそかにして、たゞ神を信じて生前の福を祈るもあり、又は佛を信じて、死後のたのしみをねがふもあり、今是等の人のためにいはゞ、神は善に福し。惡に禍すといへり。其心誠あらば祈らずとも守るべし。其行ひ不善にして祈るとも何の益かあるべき。又佛法も慈悲をとき、貪欲をいましむるにあらずや。されば儒道にかぎらず、神道佛法といへども、とかく我身の非をやめずして其教にかなふといふ事あるべからず。但しそれに付ても、身の上の非はやめやすく。こゝろの上の非はやめ難しと見えたり。たとひ、外に仁義をにせて行ふとも、險惡の心を存せば、人をあざむき得るとも、天をあざむき得じ、王法の罪はのがるとも、神明の譴せめはのが

るべからず。されば人間の私語は、天の聽には雷のごとし、世上は密事は、神の目には電のごとしといへり。何ぞおそれ慎まざるべき。

詩曰

我勸世人莫非爲、非爲由來是禍基、
 只因一點念頭錯、詎料終身自喫虧、
 姦淫賊盜方纔起、徒流絞斬卽相隨、
 拋屍露骨身難保、帶鎖披枷悔是遲、
 縱然逃得官刑過、神明報應不差池、
 及蚤回心猶可救、我勸世人莫非爲、

右譯

我は世人に勸む非爲するなかれと、非爲は由來是れ禍の基なり。只だ一點念頭の錯あやまりに因て、詎なんぞ身を終るまで自ら喫虧することを料らん。姦淫賊盜方に纔かに起るも、徒流絞斬卽ち相隨ふ。屍を抛ち、骨を露はして身保ち難し、鎖を帯び枷を披きて悔ゆとも是れ遅し。縱然たとへ官刑を逃れ得て過ぐるも、神明報應

○喫虧。缺けるをくらふ、即ち不幸をいふ。

○差池。たがはぬ。

は差池せず。蚤きに及んで心を回せば猶ほ救ふべし。我は世人に勸む非爲する莫れと。

總詩

聖人之道六言足、天下太平此一書、果能實々通行去、便是唐虞三代初、

右譯

聖人の道は六言にして足る。天下太平此の一書、果して能く實々に通行し去らば、便ち是れ唐虞三代の初め。

○唐虞三代初即ち支那太平の堯舜時代をいふ。

跋

世之能學問知義理者、姑舍無論已、其餘農圃陶冶、販鬻之徒、比屋樹畜、竈炊于閭左鄉曲、何翅億萬、苟無教道以率之、徒知競錐刀事煖飽而已、使之服勤共職、亦已難矣。況乎物我町畦、骨肉相軋、豈可遽以孝悌敦睦之行責之、若教以詩書之言、督以聖誥之訓、彼將藐乎不聞褒如充耳。曷若

以淺近易入之言誘之、使其馴致而至於善爲愈、孔子曰、民可使由之、不可使知之、周禮有讀法之會、後賢有鄉閭之約、所以扶翼覺序維持風教、亦不過使民由之爾。自學校之政不脩、而後獨以號令教天下、世主憂其化之擁闕於下也、法驅形成、科條繁興、密網深文、以囂民聽則有之、未聞有軫念宵旰託意渙汗、諄々諭民於道者、及明興迺始惓々諭告之詔、常與刑律並布天下、觀夫清帝六諭、亦規勝國而倣爲之、豈以夷變於夏者耶、至於會稽范鉉就以民俗之語爲之衍義、可謂善於教諭者、其於奉上令下、兩盡之矣。本邦表東海、號稱君子之國、方今遇禮樂之興、文獻輻輳、治具畢張、而六諭之書、爲政議所取、於是特旨併書授臣直清、撮其大意、譯以國語、遂付有司雕印、以行於四方、代道適鐸之令、惟冀爲守令者、祇承德意、以令郡縣、爲下民者、朝夕羹牆、以訓子孫、更相倡隨、陶鎔成化、遂將階鎬洛之治致刑措之隆焉。豈小補之云哉。

享保七年歲次壬寅春二月二十五日

臣室 直清奉教撰

右譯

世の能く學問して義理を知る者は姑く舍いて論ずるなきのみ。其の餘の農圃、陶冶、販鬻の徒は屋を比べ、樹畜し、閭左郷曲に竈炊する、何ぞ翹に億萬のみならん。苟も教道以て之を率ゆるなくんば、徒に錐刀を競ひて煖飽を事とするを知らんのみ、之をして勤めに服し、職を共にせしむる、亦已に難し、況んや物我町畦し、骨肉相軋るをや、豈に遽かに孝悌敦睦の行を以て之を責むべけん。若し教ふるに詩書の言を以てし、督するに聖哲の訓を以てするも、彼將に藐乎として聞かず、褻として充耳の如けん。曷ぞ淺近入り易きの言を以て之を誘ひ、其をして馴致して善に至らしむ事の愈ると爲すに若かんや。孔子曰く、民は之に由らしむべし、之を知らしむべからずと。周禮に讀法の會あり、後賢に郷閭の約あり、鬻序を扶翼し、風教を維持する所以、亦民をして之に由らしむるに過ぎざるのみ。學校の政脩まらざるより、而る後獨り號令を以て天下に教ゆ、世主其の化の下に擁闕するを憂ふるや、法驅り形威し、科條繁く興り、密網深く文り、以て民聽を囂するは則ち之あり、未だ宵

旰に軫念し、渙汗に託意し、諄々民を道に諭す者あるを聞かず、明興るに及び、迺ち始めて諭告の詔に倦々し、常に刑律と並に天下に布く、夫の清帝の六諭を観るに、亦勝國に規りて倣ふて之を爲す、豈に夷を以て夏に變するものか。會稽の范鉉、民俗の語を以て之が衍義を爲すに至つて、教諭に善きものなりと謂ふべし。其の上を奉じ下に令するに於て兩つながら之を盡せり。本邦東海に表し、號して君子の國と稱す、方今禮樂の興るに遇ひ、文献輻輳し、治具畢く張る。而して六諭の書、政議の取る所と爲る、是に於て特旨書を併せて臣直清に授け、其の大意を撮り、譯するに國語を以てせしむ、遂に有司に付して雕印し、以て四方に行ひ、道鐸の令に代ふ。惟だ冀はくば、守令たる者、祇德意を承け、以て郡縣に令し、下民たる者、朝夕羹牆、以て子孫に訓へ更に相倡隨し、陶冶化を成せば遂に將に鎬洛の治に階ひ、刑措の隆を致さんとす、豈に之を小補すと云はんや。

享保七年歲次壬寅春二月二十五日

臣 室直清、教を奉じて撰す

家道訓

解題

家道訓は我が國、民衆教育の泰斗ともいふべき貝原益軒の著にして家道の大本と用財の方法とを示せる日常道德の教訓書である。益軒、名は篤信、筑前の人、世々福岡候に事へ明暦の頃京都に出て、松永尺五、木下順庵、山崎闇齋等に學び博覽強記、夙に民衆教育に意を注ぎ平易懇篤の筆を以て何人にも解り易く道德の教を説き、旁ら農業并に衛生の事に及ぶ。本書は所謂益軒十訓の一にして専ら家庭道德並に家事經濟を説けるもの、本書の奥書に正徳二年とあり、益軒時に年八十三、尙ほ「孜孜として書を讀み、諄々として徒に授く」といふ生涯著す所の書一百餘種に達すといふ。正徳四年、福岡に歿す。其の民衆に及ぼせる教化は實に大なるものがあつたのである。

家道訓

貝原益軒著

卷之一

總論上

一、人の世にあるたかきいやしき、皆身ををさめて、家をととのふるを以てつとめとす。家の本は身にあり。故に家ををさむる主人は、まづ我が身を正しくして、家をととのふべし。身脩まらざれば家とのひがたし。家とのひがざれば身を安くしがたし。君子はつねに身をつしみて、後の患をおもんばかる。こゝを以て、身安くして家たもつべし。家の主人正しければ、家人を教へみちびくべし。主人正しからざれば、家人の則なく、善をすゝめ惡をいましめがたくして、家法行はれず。故に主人の身の行は、家人の見ならへる手本となれ

○大學に「古
の明德を
にせんと
欲する者
は先づ其
國を治め
んとす者
は先づ其
家を齊へ
んとす者
は先づ其
身を脩め
んとす者
は先づ其
心を正し
めんとす
者ありと
説き起す
を以て道

一、凡家の主として家ををさむる人は、まづ、父母によくつかふるを第一のつとめとし、次に妻をみちびき、子弟ををしふるを以て要とし、其の次に、下部をつかふに、心を用ひて禮法を正しくすべし。くるしめ侮りて虐ぐべからず。

一、子をそだつるにはおごりとほしいまゝなるをはやくいましむべし。衣服器用以下、萬の俸養、わが身の俸祿よりかろくうすく、ばうぞくなるべし。愛を過して、物ごとくにゆたかに華美なるは是れ子におごりを教ふるなり。いとけなき時よりおごれば、年長じてますます甚し。はじめゆたかにして、後におさゆるはあしし。始めかゝみて、後にやうやくのぶるはよし。いとけなきよりいまして、偽なくして誠を本とす。よろづの事、質朴にすべし。又おこたりわがまゝなるをはやくいまして、へりくだりゆづる事ををしふべし。子をそだつるに、はやくをしふると、左右の人をえらぶとにありといへるは、賈誼が名言なり。此の二に心を用ふべし。はやくをしへざれば惡にうつりやすし。附きしたがふ人あしければ、あしき事を見聞きて、一生のわざはひとなる。幼より

○ばうぞく。放俗の音の轉。
託なりとも傍。
側なりともい。
取ふに御。
と。繕はぬこ。

○賈誼。漢の名臣。

あしき事を見聞しては、先入の言主となり、後に善事を見聞きてもうつらず。あしき癖つきては、後にならひとなりて改りがたし。

一、先祖をたふとび時節の祭禮おこたるべからず。親戚をあつくしたしむべし。親戚にうとくして、外人に親しきは逆なり。國法をおそれ守り、上たる人の行、國家の政をそしるべからず。上をそしり國政をそしるは、是大なる不忠不敬のいたりなり。つゝしむべし。そしる人ありとも雷同せず、口をつぐんて言ふべからず。凡わが身をかへりみ修めて、常にわが過を責むべし。人を責め人の不善をいふを、戒とすべし。

一、凡家をさむるに、まづ父子兄弟夫婦の三親をあつくすべし。古語に、父子したしみ兄弟和し、夫婦正しきは家の肥えたるなりといへり。もし三親和せずんば、富めりといへども家のやせたるなり。

一、凡家にありて家人にまじはるには、善を行ひて惡をいましむる、是を要とす。善を行はざれば人の道たゝず。善を行ふには愛敬を本とすべし。愛とは、人をあはれみておろそかにせざるなり。敬とは、人をうやまひてあなどらざる

なり。此の二は、凡人倫にまじはりて、善を行ふ心法なり。善をするは愛敬の外になし。父母を愛敬するを本として、兄弟夫婦親戚下人に對するも皆然るべし。各其人の品によりて愛敬すべし。うとけれどもおろそかにすべからず。是れ愛なり。賤しけれども侮るべからず。是れ敬なり。

一、毎日つとに起きて、手と面をあらひ、まづ父母の氣色をうかゞひ、飲食のこのみを問ひてととのへすゝめ、其もとめあるを聞きて、つとめ行ひて、父母の心にかなふべし。子弟に、其の日の務むべき課程をさづけをしへ、奴婢に、其の日の所作を云ひつけ、おこたりなからしめ、外事あらば使を命じ、人の附託あらば滞なく整ふべし。朝は早くおき、門戸を早く開かせ、家内の塵をはらひ、門の内外庭中を掃除して、皆いさぎよくすべし。朝おそく起くるは家のおとろへとなる。いましむべし。古人、家の盛衰は、朝おくることの遅速を以て試むべしと云ひし、むべなるかな。

一、凡、家内の平日の用心は、かねてより早くすべし。第一に、來年の秋までの糧米をそなへ、次に鹽醬をたくはへ、脯醢をつくり、薪炭油をかねてより

○脯醢。脯は乾肉、醢は肉醬。

あつむべし。右の貯なければ、家の計たえず。奴婢をあはれみ、其衣食居處を察して飢寒せしめず其所を得せしむべし。男女内外の別を正しくし、武士は鎗長刀弓矢鐵砲杖棒等を、常に便よき所におくべし。常に用ふる器をととのへ備へ、器のそこなへるをば修補し、屋宅藏庫牆壁の破損せるをやく修理し、材木竹茅土石を求め貯へ、馬をよく飼ひ、其外、家に飼ふべき畜類をやしなひ菜蔬草木、時に順つてうゑやしなふべし。藏のあけたて出し入れを察し、盜賊と火災との用心、つねにきびしくしておこたるべからず。火をふせぐ器なども平日備ふべし。凡家内のこと、つねに心を用ひておこたるべからず。

一、四民ともに、常に家業をつとめておこたらず、其の上、儉約にして諸事つとまやかにし、家事におろそかなるべからず。勤むると儉なるとの二は、是れ家ををさむる要法なり。勤儉の二をつねに行ふべし。

一、家に居ては、陰徳を行ふべし。心に仁をたもち、身に善を行ひて、其の善を人の知らんことをとめざるを陰徳といふ。まどしき人も、其の力に應じて善を行ふべし。うゑたる者に食をあたへ、こゑたる者をあたゝかにし、かわ

○まどしき人は貧しきと同義。

ける者に湯水を與へ、老いたる者をたすけ、幼をいつくしみ、病人をいたはり人の子弟に孝弟をすゝめて行はしめ、人の善と才能をほめすゝめ、人のありまりをそしらず、人の惡をかくしてあらはさず、人の過惡をいさめ、道にあるいばら、からたち、くひなど、人を害する物を去り、道におちたる物をひろひて其ぬしをたづねて返し、いける物を少しなりとも故なくしてみだりに殺さず、つねにかくの如くにして陰徳を行ふべし。年をへて久しく行へば、其の善つもりて大なり。樂しむべし。貧しき人すら斯くの如くなるべし。況や富める人をや。富みて財あまらある人は、天道みてるを虧く理なれば、人にほどこさずして、財を多くあつめおけるは、後は必ずわざはひ出來て、財をうしなひ、子孫に其の財をのこしがたし。財多き人は、尤父母にあつくし、親戚朋友の乏しきをにぎはし、貧しき人をたすけ、飢寒をすくひて廣く人を愛し、善を行ふべし。夫れ人をすくひたすくるは天の好み給ふ所、天道は善にさいはひし給ふ理なれば、かくの如くひろく人を愛すること久しくば、天のよろこび給ふことふかくして、福をうくることうたがひなかるべし。天道は還すことをこのむといへり。

善を行へば天よりさいはひを下し、惡を行へば天よりわざはひを下し給ふ。善惡につきてむくいあるを、かへすことをこのむといへり。此の理かならずたがはず、是天道のまことなり。是を以て、善を行ひて久しければ、彼の、道なくして神佛にへつらひ祈り、其さいはひをうけ、わざはひをのがれんとするよりも、百倍のしるしあるべし。愚なる人は、天道の善にさいはひし給ふ理を知らざるゆゑ、天道をおそれずして天道をうたがふ。天道の善にさいはひし、惡にわざはひし給ふ理、古今からやまと其のためし多し。其の理あきらけし。即時に其しるしなけれど、後必ずむくいあり。うたがふべからず。惡を行ふと財多くして人にほどこし救はざるとは、天のにくみ給ふことあり、のがれがたし。天道おそるべし。

一、武士たらん人は武備に心を用ひて、兵具をととのへ備へ、損じたるをば修補し、常に帶佩せる大小刀、其外の刀弓矢鎗長刀など、時々ぬぐひみがき塵をはらひ、きよらかにすべし。又、金銀米錢なども、武備のため別にたくはへ置くべし。もし常の時財用不足して、急用ありとも、武備の爲にたくはへ置き

しを取りて用ふべからず。凡そ武具は他の器よりきよらかにし、にはかに事ある時、事缺ことかけつまづかざるやうに、無事の時かねて調へ置くべし。おこたるべからず。にはかの時に、陣用意に及ばずして、事にのぞんでいそがはしからず心しづかなるべし。武具も、無用の華美なる飾をなすべからず。

一、家の主あるじはつねに仁愛にして、善を行ふを以て樂みとしつとむべし。餘財あらば、兄弟親戚の貧窮をにぎはし、朋友の乏しきを助け、わが采地さいちの農人の饑寒をすくひ、わが家に久しく來れる貧困なる者にほどこし、窮民のより所なき者あらば、我がちからに隨ひてすくふべし。乞人こっじんの内にて、老人病者かたは、殊めしひに盲瘖めしひなえ、老いて子なく、幼くして父なき者、養はるべき親族なくて、みづから食を求めかね、せんかたなくて乞人となる者あり。是皆窮民のより所なき人なり。あはれむべし。かゝる急難なる者あらば、ちからの及ぶほどは、すくひめぐむべし。餓ゑたる者はやしなひやすし。かくのごとく人をすくひ善をすることは、人間世の最も樂むべきことなり心を用ふべし。漢かんの明帝めいの弟東平王とうへい、都に來朝せられしに、明帝の、汝國にありて何事か樂しきと問ひ給へば

東平王、國にありて善をすること最も樂しと答へられしことむべなるかな。凡そ富貴なるも貧賤なるも、其位に應じて善をなすべし。志だにあれば、貧賤にしも日々善行はる。善をする程樂しき事なし。つとめて善を行ひて、此樂を知るべし。財ををしみては善を行ひがたしと、古人いへるもむべなり。又無益のことに財をつひやすは愚なり。是れ善を行ひ人を救ふに志なければなり。

一、家ををさむるにも忍の字を用ふべし。忍とはこらふるなり、堪忍するをいふ。おごりをおさへて、欲をほしいまにせざるもこらふるなり。又、わが家の貧なるをこらへて人をむさぼらざるべし。凡ての人君子にあらざれば、わが心にかなはざる事多し。堪忍せざらば人の交は和やはらがず。然るに父兄は、子弟のおのれにつかへやう足らずして、心にかなはざれば子弟を責む。子弟は、父兄のめぐみうすくして、あきたらざれば父兄をうらむ。其餘、夫婦親戚も亦しかり。たがひに堪忍せざれば、いかりうらみ出來て、父子兄弟夫婦親戚の間むつまじからず。此ゆゑに、人の行のわが心にかなはざることを、たがひに堪忍してうらみいからざれば、一家の内やはらぎしたしむ。是れ家をととのふる

道なり。又人のあしきをばゆるして堪忍し、わが身には道をつくして、人に堪忍せらるゝ行をなすべからず。

一、凡そ家人を使ふには、人の心をおしはかり、うれひ苦しみを知りて、人のくるしみなきやうにほどこすべし。奴婢は、主人を頼んで身をやしなふ者なり。心を用ひて情あるべし。刻薄にして情なく、彼をくるしむべからず。およそ人をつかふ者は、下人のうれひくるしみを能く思ひはかりて、かんがへ知るべし。

一、家ををさむるに四の教あり。一には家業を勤めて生業ををさむ。二には儉約にして財用を足らす。三には、つゝしみて我身をたもつ。四には、恕にして人を愛す。是王凝が語なり。恕は、我が心にて人の心をおしはかりて、人の好むことはほどこし、きらふ事はほどこさず。およそ家ををさむる人は、皆此四を守るべし。

一、子弟のいとけなき年より、よき師をえらび求めてはやく聖賢の書を讀ませ、善をしへ惡をいましめ、孝弟忠信禮義廉恥の道を知らしめ、行はしむべし。

かりそめにも、惡しき友に交らしむべからず。是第一にいましむべし。あしき事、見聞かしむべからず。いとけなき時は、殊に惡しき事は早くうつりやすしよき事もあしき事も、先入の言はやく主となる。よき友を求めてまじはらしめよき事を見聞かしむべし。善惡皆な習ひ馴るゝよりうつりやすし。習れ馴るゝ事つゝしむべし。

一、身を修め家をたもつに約の字を守るべし。約にすとは、つゞまやかなるなり。ほしいまゝならず、取ひろげざるを云ふ。是を以て情欲をふせぎ、財用を節にするは、身を修め家をたもつ道なり。論語に、約を以て失ふものすくなしとのたまへり。約なれば、あやまりすくなしとなり。

一、家の主となりては三族をしたしむべし。三族は、第一に父族、第二に母族、第三に妻族なり。父方の一族は本族といふ。先祖より傳はれる血脈同じ。親疎の變りあれど、われと同氣なるゆゑ、あつく親むべし。父族をあつくしたしむは、是れ亦先祖へつかふる道なり。次には母方の一族は、是父族に次ぎてしたしむべし。次に、妻の一族は母の族に次げり。三族をしたしむ。其次第輕

重かくの如し。是これいし古この法なり。今の人は、妻族をもはら親みて、父族母族にうとし。輕重あることを知らず。父母への不幸なり。おろかなりと云ふべし。妻族をしたしむべからずと云ふにはあらず、輕重の次第あるべし。

一、わが身朝夕飲食の俸養はかるくして身をば勞動すべし。奢りて酒食の美をこのみ、怠りて身を安逸にすべからず。おごらず怠らず、かくの如くすれば第一徳を養ひ、次に身を養ひ、次に財をやしなふ。三の益あり。飲食淡薄にして身を勞動すれば、食氣しよくきとじこほ滯らず、氣血めぐり、脾胃ひひやぶれずして生を養ふによろし。又身を勞すれば、艱難勞苦にたへて、忠孝の行、學問藝術を習ふにつとめよし。もし身體を勞動せずして安逸にならへば、艱難に不堪して、忠孝のつとめをくるしみ、學問技藝におこたり、殊に士は武勇のたしなみななく、軍陣にて艱苦かんくにたへず、病ちり身よわりて用にならず、武勇をはげみがたし。およそ心は安靜にし、身は勞動せしむべし。

卷之二

總論中

一、家のわざを能くつとむれば、利養は求めずして其内にあり。士さぶらぢは奉公をよくつとめてへつらはず、農は田畠をよく作りて、公きみをおそれて公役をよくつとめ、工は器物に心を用ひてよく作り出し、粗相なる物をつくりて人を欺かず、商は交易をつとめて偽らず、高利をとらず。四民共にかくのごとくなれば、あながちに利をむさぼらざれども、福祿はおのづから來る。つとむべきわざを正路につとめずして、ひが事をして利をむさぼる者は、一旦は人により幸さいはひありといへども、天道のにくみ給ふ理なれば、後は必ず禍あり。愚人は、當時早く利を得んとして、後の禍をしらず。四民共に、只正直にわが家のわざをよくつとめ、天道をおそれて偽いつはりなかるべし。是わざはひをのがれ、福さいはひを得る道なり。

一、人の家の禍は多くは利を求むるよりおこる。利を貪れば却て財たからを失ひ、

わざはひ來ること多し。利を求めんよりは、只家業を怠りなくつとめ、家財を妄に費さずして、分外の利を貪らざれば、禍なく財を失はず。凡利を貪るは禍の本なり。戒むべし。

一、古語に、つとむれば貧にかち慎めばわざはひにかつといへり。此の語、甚だ人に益あり。家のわざをよくつとむる人は必ず富む。身のことをよく慎めば、必ず禍なし。勤慎の二字、常に守り行ふべし。自ら行ひて家人にも行はしむべし。勤むるは天の道なり。天はめぐりてやまず。慎むは地の道なり。地はしづかにして動かず。つとむると慎むとは、天地の道にしたがひて則とす。是人の行ふべき道なり。此事深き理あり。

一、わかき子弟のともがら、父母の家にありて、いまだ君につかへざる者は、父母につかへていとまなきをよしとす。又家事をよくつとめて怠らず、父兄の勞にかはるべし。かくつとめ行ひて、少しもひまあらば、書を讀み學問し、或は文藝武藝をならひつとむべし。如此つとむれば、いとま無くして妄念おこらず、ひが事を行ふべきひまなし。子弟わかき者のひが事あるは、ひま多くし

てすべきわざなきゆゑ、無頼の悪少年にまじはり、妄念おこり妄行をなす。たとへば人を踏む馬も、馳せゆく中には踏まず。つい立ちて居る時は、足にいとまある故に人を踏むがごとし。

一、客をまねきて饗せば只眞實に客の心にかなふをむねとすべし。かざるべからず。食品すくなくいさぎよくし、味をよくしてすむべし。酒をすむるに心得あるべし。多少は、のむ人の分量にしたがふべし。少し強ふるはよし。しひても猶辭せば、其心に任すべし。酒をこのんでのむ人にも、分量の多少あり。其量を知らずしてたらざるは害なし。みだりにしひ過して、人をくるしむべからず。大に酔ひぬれば、禮義を失ひ、亂に及ぶ。放言を發し病を生ず。古人酒を狂藥と名づけしことむべなり。酒をこのむ人はあながちに辭せず、大かたは、其の人の心にまかせたらんこそ、客の心にかなひて宜しかるべけれ。酒を以てよろこびを合すといへば、只人の心をよろこばしめ、興をやるほどにすむべし。古人も、酒は微醉にのみ、花は半開に見るといへり。主も客も、少したらざる程に飲むべし。十分にゑふは、必ず後のうれひとなる。殊に下部は

○論語に曰く
唯酒は量なし
亂に及ばず。

○吉田兼好。徒然草の著者。

ほしいまゝに飲めば、狂してわざはひとなる。吉田兼好がいへる事むべなり。あよそ、酒をほしいまゝにすれば、たかきいやしき家をやぶり身を失ふ。いましむべし。人の家をやぶり身を失ふは、多くは酒の禍なり。

一、親戚をば、時々まねきて饗應すべし。しからざれば情意うとくなる。食品はうすくし、情意は厚かるべし。

一、家ををさむるに、法なくいるかせにして、家道みだりなれば、其の家の奴婢もおこたり、無禮にしてわがまゝになるゆゑに、身のならはし、悪しくなる事をば知らて、其の家風のいるかせなるをよろこぶ。又主人儉約ならざれば、奴婢のためゆたかなるやうに思ひてよろこぶ。此の二は、無道にして却ていやしき愚なる者の、ほまれを得るものなり。故に奴婢のほまれを得る人は、却て其家法みだりなる事多し。しかれば、いやしき者と愚人とのほまれをよろこぶべからず。そしりをくるしむべからず。又、いやしきものと愚なる者のほめそしりを聞かば、信ずべからず。是を信ずれば、あやまりてひが事あり。

一、家を治むるに奴婢最もをさめがたし。これをつかふに尤も道あるべし。遠

○ゆるかせに流るゝこと。

ざけてきびしければうらみそむく。近づけているかせなればおごり忘る。恩愛を以てなつけ、禮法を以て正すべし。如かく此ごとくすれば、うらみなくおごりなし。仁愛と禮法と、二の者ならび行ふべし。

一、奴婢は才力ありて質實なるこそねがはしけれど、かゝる者はまれなり。才辨にして利口なる者は、多くはまことすくなくして、主をあざむき、かだましき事を行ふ。家主たる人、もし是を喜びて家事をまかせては、必ず大なる禍となる才徳二ながら得がたければ才鈍くとも質實なるを好むべし。鈍くしてはかゆかざれども、質實なれば、主人の教にしたがひやすく、後の禍なし。

一、いにしへの諺に曰、不癡不聾不爲家翁ちやらすうらなこさればかかうとならずと、言ふ意は、家の主となる者は、家人の過あるを堪忍して、愚なるやうにあるべし。かしこだてして明察にすぐれば、家人くるしみて家をさまらず。又家人の、人の悪を告ぐることをとりあげて、聞き用ふべからず。耳聞かざるがごとくなるべし。かくのごとくならざれば、家の主人となりがたし。此ことわざ、よく心得べし。大かたは知らずがほにて過ぐすは、わざはひなし。是れ智者のすることなり。殊に小人婦人

の言ふことを信ずれば、必ずあやまる。是を聞きて信ずるは愚なり。かゝる知なき者にたぶらかさるゝは、まことにあさまし。よく心を用ふべし。

一、下人利口にして我心にかなひたりとも、愛し過すべからず。愛過ぐれば必ずおごりおこたりて家法をみだし。私を行ひて主人の禍となり、其身もほろぶ。凡そ利口なる者は必ず佞奸なる故、却て主人の心にかなひやすし。是を愛すればわざはひとなる。おそるべし、このむべからず。

一、奴婢に罪ありとも、いかりにくむ事を過すべからず。にくみ過せば必ずうらみそむきて禍となる。愛するも憎むも、よきほどあるべし。

一、凡、物各職分あり。犬の夜を守り、鶏の晨をつかさどるも亦職分なり禽獸猶かくの如し。況や人をや。人各職分あり。家の主となりては其家人をあはれみ、其のひがごとをいましむ、是れ職分なり。民のつかさとなりては、其民をあはれむを以て職分とす。其の職をつくして其の位に居るべし。其の位に居て其の職分をとめざるは、名ありて實なしといふべし。

一、家の主となりて、初にうとめて苦しまざれば後に樂なし。父の譲りをう

けしはじめ、又祿を初めて得たる時より、家ををさむるに約にしておごらず欲をこらへてほしいまゝならず。家財を用ふるに、儉にして費さず、家業をつとめておこたらざる、是れ皆初にくるしむなり。如し此すれば財ゆたかにして一生の間、身ををはるまでもしからず。是れ後に樂しむなり。此の如くはじめにつとめて苦しむは、是家をたもつ要道なり。凡の事、はじめにつとめざれば後の樂なし。若き時くるしんでつとめまなべば、一生の間、老後までの樂となる。わかき時いたづらに日を過せば、一生の間愚にして身ををはる。

一、婦人と小人の言、奴婢の讒言聞言を聞くべからず。父子兄弟夫婦のいたれるしたしみも、此等の人の間言を信ずれば必不和になる。婦人と小人との讒を信じて、とがもなき子をころし妻をころし、臣をころしたるためし、和漢古今すくなからず。おろかなることのいたりなり。凡そ讒言おそるべし。かりそめの事にも、片口をさして信ずれば、必ずあやまる。つゝしむべし。周子曰、家人の離るゝこと、必ず婦人におこる。

一、家の主人たる人は讒を信ずべからず。凡そ讒言は小過を大過に言ひなし

○論語陽貨篇
子曰、唯女
子と小人とは
養ひ難しと。

○周子。周茂
叔宋の大儒。

小悪を大悪に言ひなし、似たるを實に言ひなし、無きを有るに言ひなし、或は其の人のきらふ所を知りていからしむる、皆讒言のたくみなる言なり。さく人明らかに察すべし、まよふべからず。才力ある人といへども、讒者には迷ひやすし。かなしむべし。只、智者は惑はず。

一、富貴の家に、貧賤なる親戚の出入するは、主人の仁愛のあつきことあらはれて、其家の面目とすべし。かゝる人の來るを恥づべからず。

一、我が身の大事ありて、思慮決しがたきことあり、又おほやけに申すこと、皆思慮ある人に問ひはかり、其人の評論にしたがふべし。我が身のことは、私欲あるゆゑ、才ある人も心くらくなりて、善惡の理見えがたし。我が思慮する所、十分によしとおもへど、傍より見ればあしきこと多し。人の上のよきもあしきも、わきよりは明らかに見えやすし。碁をかこむものは、まよひて手見えす、かたはらより見る者は眼あるが如し。すべて人は、一世の内、大事ありて我が思案にていかゞせんと、獨り決定しがたき事多し。知慮ありてよく是非を分別する朋友を平生もとめて、常にしたしく交り、大事ある時、其の人の思慮

をかり用ふべし。我が身、又は子弟などの身に大事あらば、われひとりからはからひて、決定することなかれ。知慮ありて其の事をよく心得たらん人に問ひはかるべし。

一、人家の内子弟婦女のそしりを言ひ傳へしむることなかれ。人の心の同じからざること其の面の如し。人のなすこと、我が氣にあはざること多くして、かげにては人の事をそしりかたる事あり。それをかたりつたふれば、聞くもの必ず怒りうらみ、間隙是より生じて、不和になる。智ある人は、かやうの言を聞きいれず、耳に聞きたるまでにて、心にかげずして、うらみいかりをおこすべからず。およそ小人婦女しもの云ふことは、道理にちがへること多し。我が心にかなへば褒め、かなはざればそしるは、かゝる人のならひなり。必ずみだりに取りあげて聞入るべからず、信ずべからず。是を信ずれば、父子兄弟夫婦も必ず不和になる。おそるべし。

一、妾を求むるには其の性行のよきこと、良家の女とをえらぶべし。良家とは、族姓いやしからずして、風俗をだちよきをいふ。其の人品のよあしと、

○妾のこと
及べは時
の習俗に
より見れば
今日の無
用の言に
れど、配偶
の選擇に就
の教訓なり

家法のよしあしをえらぶべし、人の子は、父よりも母によく似る理あり。故に其の心の賢愚も勇怯も、多くは母に似るためしあり。勇者の女子のうめる子は勇あり。

一、養父母となり養子となる者人ごとに賢者にあらず。養父母となりては、我が生める所にあらざれば、養子にまことの愛なし。養子となりては、我を生めるおやにあらざれば、まことの孝なし。父愛なく子孝なくして、養父養子心になはざることを、たがひにうらみかりて後、義絶し、あだかたきとなるもの世に多し。子なくんば、其の同姓の内にて、年長じて後、よき生質の人をえらびて養ふべし。同姓の子弟によき人品なくんば、遠慮あるべし。又はじめは養子を愛すれども、實子を生んでのち私欲おこり、養子をうとんじ憎む者多し。是亦はなはだみにくし。心かろくして、みだりにはやく他の子を養ひて、後悔すべからず。故に養子をするには、よくえらんでおそきに宜し。

一、家ををさむるに、男女の別正しく内外の防をきびしくすべし、混乱ならしむべからず。男女の別なく、家法正しからざれば、子弟のともがら禮儀なく風俗みだりにして淫行おほく、家風をけがし罪におち入る。子弟をゆるして淫邪におもむかしむべからず。

一、婦人女子の、しばし外に出てて禮節をつとめ遊觀をこのむはいまし。婦人は内に居て、家を治むるを職とす。外に出づることしげきはよろしからず。親戚の間も、只使を以て音信を通ずべし。

一、婦女は、うまれつき陰柔にして智なく多くは姦邪なり。正道にしたがひがたし。奴僕はならはし卑しくして、義理にうつりがたし。ともに愚にして道をさとしがたし。故に道理を以て、其過を一々にたゞさんとせば、うらみそむき、不順にして家道和睦しがたかるべし。只つねに家法を正しくし、禮を以て相對せば、おのづからひが事すくなかるべし。

一、家人は、かねて禮義を正しくして、惡事をふせぎいましむべし。惡事出來てのちいましむるはおそし。禮は未然をふせぐ、法は已然にいましむといへり。未然是、いまだ事出來ざる前なり。已然は、すでに事出來て後なり。禮は、たとへば無病の時よく養生するが如し。病なき時よく養生すれば病おこらず。法

は、病おこりて後薬をのむがごとし。病おこりて薬を服せんより、無病の時よく養生すれば病なし。

一、家のさかえ衰ふるは家法の正しくなるを盛とし、家法のすたるを衰とす。富貴なりとて盛とすべからず、貧賤なりとて衰とすべからず。家の盛衰は、禮儀の行はるゝと行はれざるによれり。是古人のいへる意なり。今の世の人も亦かくの如く心得べし。

一、奴婢をつかふに、心はめぐみふかくして禮法はきびしく立つべし。法いるがせなれば、あなどりて罪をおかしとがにおち入る。いやしき者は、法いるがせなればおこたりて惡におち入り、とがをおかし易し。あはれむべし。およそしもべなどをつかふにも、心を用ひてあなどらず、又、しもべにあなどられず、法をおかされず、おこたらしめざるがよろし。又不慈にしてかれをくるしめ、所をうしなはしむべからず。陶淵明が、一僕を子にあたふる文に、これも亦人の子なり、よく遇すべしといへり。法とすべし。

一、もし惡性なるしもべありて、不忠をなさばうちたゞき責めはたるべから

ず。事なくして、はやく追ひ出すべし。

一、子孫のあらそひを慮りて、年いまだ老いざるに、はやく書置をする人あり又書置をいつはりて作り出す者あり。是亦遠慮すべし。人の父祖となる者は死後まで子孫のためを思慮すべし。

一、喪祭の禮は、をはりをつゝしみ遠きをあふ道なれば心を用ひてあつくすべし。あろそかにすべからず。然れども國法にそむくべからず。時宜にしたがふべし。國法と風俗にそむかざるかぎりは、其の心をつくすべし。先祖は子孫の根本なり。年數へだたり遠しといへども、思ひしたひて忘るべからず。時節の祭つゝしみあつくし、本に報ずるの心おこたるべからず。木の根につちかひ養へば枝葉しげる、先祖にあつくすれば、子孫さかゆる理あり。しかれども、君子の先祖にあつきは、さかえを求むるためにあらず。

一、もろこしの諺にかねて後の用心なきことをそしりて曰、三月に桑をうゑんことをおもひ、六月に塘を掘らんことをおもふ。言ふ意は、三月蠶を飼ふ時にいたりて、はじめて桑をうゑんことをおもひ出し、六月旱する時にいたりて

はじめて塘を掘らんことをおもひ出すは、かねて後の用心をせざる人のゆだんなる事をいへり。遠き慮なければ、必ず近き憂あり。家ををさむるには、萬のこゝ後を慮りて、かねてはやく其の用意をすべし。如く此すれば、時にのぞみてにはかに行きあたりくるしまず。中庸にも、凡そ事前に定むれば不踏といへり。初にうれへざれば、をはりに樂なし。

一、我が身事足ることを知らずして人をむさぼる者は、身富めりといへど心にまどし。我が身、事足ることを知りて、むさぼりなき人は、身貧しけれども心は富めり。

一、訟をば俗にくじと云ふ。くじは人と理非をあらそふ也。凡そ初において證人を多くむすび、證文を詳に取りおき、初をよくつゝしめば、終に訟なし。初おろそかなれば、人よりひが事を言ひかけられて、後に悔あり後に悔なからんことをおもはば、初に心を用ひてつゝしむべし。およそ我が身正直にして、人に邪曲ありとも、なるべきほどは堪忍すべし。我が取るべき財を人にかすめらるゝとも、我家の亡びにならざるほどは、損失を堪忍すべし。小人とあらそ

ひて、奉行に訟へ對決し、人をとがにおとしいるゝも快からず。其の上、吾に十分理ありとおもへど、又彼に理ある事あり。われのみ理ありとおもふべからず。我が身には私あるゆゑ、非をも理と思ひあやまることあり。一偏に思ふべからず。もし彼に理あるをしらて訟ふるは我が恥なり。又訟をきく人、人ごと必ず賢明ならず。さゝあやまりて是を非とし非を是とし、或はかた口を聞きて信じ、聞きあやまる事多し。又親類權貴の人に頼まれ、或は賄賂に耽りて私する事、古來其例すくなからず。されば如何なる正直の人、道理明白にして、證據分明なれども、終に其理を得ずして本意をとげず、却てとがにおち入ること多し。吾に理あるをたのむべからず。已む事を得ば訟をなすべからず。十分に我に理ありとも堪忍すべし。もし已む事を得ざることありて訟へば、只其の一事のみ言ひことわりて、其人の他の悪事を、ことばにあらはすべからず。

一、人に五計あり。一生の間十歳より六十まで、時につけて爲すべきいとなみある事をいへり。まづ、十歳の比はひとへに父母の養によりて成立てり。父母のをしへにそむくべからず。是を生計と云ふ。二十歳は、もとより身をつゝ

しみ、學問し藝をならひ、家學をつとめて身を立つる計はかりごとをなすべし。是を身計と云ふ。三十歳より四十歳にいたりては、家事をいとなみて、家をたもつ計をなすべし。是を家計といふ。五十にしては子孫のためにはかる。子孫は、年わかき世事になれず。父まづ其ために計をなすべし。是を老計と云ふ。六十より以上は、我が死後の事をいとなみはかるべし。死後の事を早くいとなまざれば、死にのぞんで、くやしけれどかひなし。此の五計は、もろこしの人、朱新仲が語なり。是よのつねの人も及ぶべき計なり。もし此年に應じて計をなさずんば、おこたれるなり。ちから無しといふべし。

卷之三

總論 下

一、人の子孫たる者は其の家の先祖の家法をよく守りて失はざれば、たとひ其の子孫才力なしといへども、よく其の家をたもちて、いつまでも長久なり。其の故は、其の家をはじめて持ち立てたる先祖は、それほどの才智あり、其上、わかき時より事に多くなれ、艱難をへて萬事に熟し、世のありさま、人の心の善惡、人のうれへかなしみをよく知れり。此の故に、其人の立てたる家法は、必ず堅固にしてやぶれなし。子孫よく其法を守れば、やぶれなくわざはひなし。其の子孫、才力聰明すぐれたる人ありとも、はじめて家を持ち立てたる先祖には及びがたし。もし其子孫利口にして、先祖のさだめ置きたる法はむかしの事にて、今の世にあはざるとして、其の先祖をないがしろにして、其の法をやぶり新法をたつれば、必ず其の家亡ぶ。先祖の法を手本にして守り行はば、

其の家いつまでも長久なるべし。

一、家人に對するに嚴正にして厚重なれば、おのづから威ありて人あなどらず。かくの如くなれば、怒りてはげしく悪言を出さゞれども、人おそる。

一、子弟はいふに及ばず、下部しもべに對すとも其の罪あるをいかり、悪言を出していやしむべからず。又うちたゞきはづかして、犬馬の如くいやしむべからず。下部も亦人の子にして、人倫なり。人倫まじはりかくの交まじはりのごとく情なかるべからず。いやしくとも、人倫の道を以てつかふべし。いはんや天地のうみて子としてあはれみ給ふ人なれば、いやしめにくむべからず。又人の過惡を責めて、人のために我が心を亂して怒りにやぶらるべからず。是れ己ををさめ人ををさむる道を失へりといふべし。怒甚しければ、必ず目をいらゞげことばをあらくして、人をいやしむるにいたる。君子のしわざ、此の如く心をとらみだしてみぐるしかるべからず。又責めらるゝ者は、我が悪しきをわすれ、恥辱にあひたるを本意なくおもひ、いかりうらみて心服せず。下部にあやまりあらば、只しよつよう從容として誠を以ていましめ正さば、彼もし人心あらば感通すべし。

一、家ををさむるにも、下情かじやうかみ上に通ずるをよしとす。下情上に通ずとは下つかたの人のうれひくるしみ、善惡曲直のありさまを聞きて、明かに知るを云ふ下たる者のうれひくるしみ、よきあしきを知らざるは、愚なり。

一、權勢ある家の賓客を司るやつこは、必ず主人の權勢にほこり無禮にして賓客をあなどる。主人より時々心をつけて無禮を戒むべし。其やつこにまかせおくべからず。やつこの無禮なるは責むるに足らず。只其主人をそしる。主人是を知らざるべけんや。

一、人のいましめは防つゝかのごとし。大水をふせがため、かねて日での時つゝみを築きおけば洪水のわざはひなし。人もかねての防ぎなければ、うれひの來ることはかりがたし。人家の内、年わかき子弟婦女奴婢のともがらは、いまだ惡事出來らざる時、かねて禮法を正しく、内外上下のへだてありて、家法をきびしくすべし。ことさら、酒色のつゝしみをきびしくすべし。又無頼の惡友にまじはる事をかたく禁ずべし。打まかせ置きて放逸をゆるし、姑息こそくの愛を專にすれば、不意なるわざはひ出てくるものなり。惡事出來て後はおさへがたし。

○顔之推。字
は子介、隋初
の人。

きびしく責むればうらみそむく。顔之推が、婦を初來に教へ、子を嬰孩に教ふ、と云ひしも此の意なり。はじめに早くふせげば、力を用ひずしてしるし多し。末を救はんとすれば力及ばず。

一、古語に一物あれば一累をそふといへり。草木鳥獸器物など、何にしても一向にこのみ過せば、必ず其物に心をうばはれ、心に一のわづらひをそふるなり。其上、事をこのめば、ひまと財とをつひやし、下人をなやます。このまざれば事すくなくしてよし。君につかへいとまなき人、父の家において孝行にひまなき人、官職をあづかる人、藝術の家業ある人、此の四等の人は、心を清くし事をはぶくを宗として、さし當りたる職分をつとむべし。事を好み物を玩ぶべからず。事を好みて隙をつひやせば、我が身にさしあたりたる職分の務には、必ずうとくなる。

一、小兒をいましめて、もろくの蟲魚など、およそ人の害にならざる生物をころさしむべからず。又生類をくるしましむべからず。犬猫鶏鴨などをなやますべからず。不仁にしてみだりにももの命を絶つは、天道にそむくことを、

幼少の時より早く教へいましむべし。

一、常に居る處は、陽に向ひ陰に背くべし。如く此なれば日の光明かに、月に向ひ、夏すゞしく冬あたゝかにして、身を養ふに宜し。又居室も庭中もつねに掃除していさぎよくすべし。かくの如くすれば、氣を養ひ心をいさぎよくすくらくけがらはしければ、心氣の養とならず。又、居る處暗ければ元氣をふさぐ。甚明らか過ぐれば精神を破る。居る處かざりを好めば慾を生ず。

一、人の家居は貧富によらず、身の分より少しせばきがよし。せばければつひえすくなく、事すくなくして住みよし。富貴なりとも無用の屋作ひろくすべからず。ひろ過ぎては通行なやみあり、掃除に家人のつとめしげく、修理もむづかしく、財の費多し。されど又、無用の用とて、常に用なき所少しありてよし。事ある時のためなり。家居は、只堅くいさぎよくして飾なきが、心を養ひ目を養ふによし。

一、財を多くたくはへて富める人、もし生れつきて仁心なくとも我が身のため子孫のためを思ひて、善を行ひ人をたすくべし。財寶を多く子孫に残さんよ

知慮熟せざれば、老人のおろかなるにも及ばず。わかき時は其の理をしらず、久しく事になれ、年老いて後、父祖の言理あることを知る。

一、凡そ家の主は四民ともに其身ををさめて、家を興さんことを志すべし。まづ親先祖より傳はれる祿と財とを失はずして、よくたもつを孝とすべし。つみなけれど、災ありて失ふはちからに及ばず。不徳にしてみづから財祿を失ひ、或は財祿をへらすは、大なる不孝なり。家業をよくつとめておこたらず、儉約にしておごらず、萬の事つゝしみてあやまりすくなくし。家を能く治めておこたらざるは善士なり。其志ある者は、其事遂に成るといへり。其志かくの如くなる善士は、必ず家をおこす。

一、居る處の室内にある器物衣服調度をば、年老いたりとも猶も立居くるしからずば、十たびの内五六度は、みづから立ちて用事をとゝのふべし。奴婢を用ふべからず。是れまづわが身をうごかし勞して生を養ふ道なり。其の上、奴婢も亦しばしば立ちうごかず、勞せずしてよし、富貴にして奴婢多くとも此の如くすべし。況や貧家ならばおほからぬ奴婢を、しばしばよびて勞せしめん

より、みづから立ちて、心のまゝに事を調ふるが、心のなやみなくして快し。又奴婢をよんで、一事を言ひつけなさしめば、其の時になほつかふべき事あらば、思ひ出して、退かざる内に、其のついでを以て、二も三も事をなさしむべし。奴婢の我が前にある時は、心を用ひずしてあだに過し、なさしむべき事を言ひつけずして、退きて後おもひ出し、しばしばよんで事を命ずれば、我が身も奴婢も、事しげくいたつがはしくしてひまなし。是れ人をつかふ道に心を用ひざるなり。奴婢も亦、主人の前に出て、一事をつとめ終らば、又何事ぞあらばつとめんと思ひ、用なくとも、まづそこについゐて、主人の命をうかゞひしばし待ちて後用なくんば、立ちてしりぞくべし。

一、もろこしの古き諺に、萬事從寬、其福自厚といへり、寬とは、せばしからず急ならず、心ひろくゆたかにして、人の過をゆるすを云ふ。此の如き人は福あつし。急にしてせばしき人は福すくなし。おきてひろき器にはさいはひあり、心ゆるやかにならかなる人は、福ながきためし多し。

一、家に居ても國にありても、善を行ひ道にしたがふほど樂しむべきことな

し。はじめはつとめならひて善を行ふべし。久しく行ひてならひ馴れぬれば、賢哲にいたらざれども、善を行ふこと楽しくなりぬ。才藝は雑事なり、初は面白からざれども、久しく習ひ馴れぬれば後にももしろし。況やよき道を行ひ熟せばあに楽しからずや。

一、おろかなれば人を恨みやすし。故に史記に曰く、知あれば輕しく人を恨みず。此言むべなるかな。知ある人は、人の我が心になはざることをあるをば故あるらんとおもひ、人をとがめず、或は人のしわざの道にそむけるは、生れつきておろかなる故と思ひて、人をゆるす。たとへば、赤子の井に入らんとするが如くなればなり。又人の生つき偏なれば、其の行正しからず。智者は其の偏なる病、あはれむべきことを知りていからず。家の主となる人は此の心得あるべし。親戚家人、我が心になはざるをうらみいかりて堪忍せざれば、家道和睦せず。

一、園に草木をうゑて愛するも亦心を養ふ一助なり。いとまあるとき、少し心を用ひて、あるにまかせて求めやすき物を植うべし。得がたき物をしひて得

○史記。百三
卷。司馬遷
の著せる
有名な
歴史。

んとし、みだりに人に乞ひもとめ、あたひ多くつひやし、其の品の多きと、花のすぐれたるにほこり、花のよきをあらそひたゝかはしむるは、事多くなり、心のわづらひとなり、心術をそこなふ。是れ樂みにはあらず苦みを求むるなり。

一、園に植うる草木、異なるを好むべからず。又しげきはむづかし。作木すべからず。只ひろき園には、果樹花木葉樹品々植ゑて、四時の推移るを觀るべし。又果を數品うゑて、家祭にそなへ賓客をもてなし、人にあたへて用多し。草は藥草花草を少しうゑて、その名をしり其の花を玩ぶべし。居室の小園には、しげらざる常葉なる小樹を少しばかり植ゑて、石に伴はしむべし。小園の内は草木多ければむづかし。又庭に草木しげれば陰氣ふかく、夏は豹脚多くして人をさす。

一、家園ををさめ草木を植うるは、もとより氣を養ひ心を樂まんためなるに心もちひ過して、心を勞し功を費し、家僕を勞せしむるは、心を養ふ物を以て、かへつて心を苦め隙を費すは、損ありて益なし。

一、花草などをうつし植うるは、勞なく活きやすし。されども初め植うるに

○かじけて、
弱りかゝまる

植うべき所をえらんで植うべし。如此すれば、後日に移し植えずしてよし。草も木も、移し植うるは事多くむづかしく、功をつひやす。木を植うるに、尤はじめに植うべき所をえらんで、其の上、長じて後までよき所に、他木との間遠く植うべし。はじめに所をえらばずして、みだりに植うれば、後に長じて所を得ず。所を得させんと他所にうつせば、多くは枯る。枯れざるもかじけてさかえず。所を得ずとも年久しくしてさかえ長じたる木をば、やむ事を得ばうつすべからず。所を得させんとして事を好むべからず。もし小木を、初め植えて所を得ざるをば、長茂せざる時早く移すべし、小木は移しても活きやすし。

一、宅にはじめてうつらば、まづはやく果木を植うべし。次に他木に及ぶべし。十年の計は木を植うるにあり。樹木を植うるには、果を先とし花を次とし、葉樹を又其の次とす。果は尤人に益あり。多く植うべし。取わき、橘柑柚を多く植うべし。みのりて熟したるは、うるはしき事花にとらず。柿梨栗椒など、好品をもとめ植うべし。花木は梅を先とす。紅梅もよし、櫻亦よし、早く散るうらめし。つばき、花久しく咲きて、葉うるはし。挾せば活きやすく、花

早く開く、海棠、躑躅、杜鵑花もよし。葉樹は、杉、檜、樅、金松、羅漢松、冬青樹などよし。竹を北方に多く植うべし。火と風をふせぎ、又伐りて時用に備ふ。前庭には、柳、櫻、松、柏など植うべし。しげきを忌む。陰氣ふかく、夏は蚊多くしてうるさし。又菜は日用の助となり、宅中に植うるは、新しくして市に買ふにまさり、其の葉さかえてうるはしきは、目をよろこばしむること花草にとらず。

卷之四

用財

一、萬の事皆法あり。法にしたがへば其の道立ちて其の事成る。法を守らずして、只我が心にまかせ行へば、必ず其の事やぶる。家ををさむるに尤も法あるべし。法なければ必ず財用盡き、困窮して家を保ちがたし。

一、凡そ家を治むるに財を用ふる法を知りて、かたくつゝしみ守るを要とす是を知りて守ると、知らずして守らざるとは、家の盛衰存亡の本にて、其のかる所、いと重きことなれば、つねに心を用ひ、よく其の法をしりて守るべし。おろそかなるべからず。其の法を知らず、おろそかにして、心を用ひざれば、必ず困窮にいたりて家をやぶる。今の人、家の主となりて、多くは家をたもつ道をおろそかにして、財を用ふる法を知らず。故に貧窮にいたる。貧窮なればみづから苦しむのみならず、親を養ふことうすく、君に仕ふるにつとめがたく

○おぎのる。
掛の賣買を云
ふ。こゝにて
掛り買ひのこ
と。おひめ。負
債。

人に施しめぐまず、禮義を行ひがたし。人に乞ひ借り買ひおぎのりて、おひめをつぐのひがたし。百行かけて行はれず。武士は武備なくして戦陣をつとめがたし。不意なる變にあへば、困苦して如何ともすべからず。貧苦のわざわひ、子孫にいたりてやまず。或は一代にて家をやぶる。悲しむべし。諸の細事雜藝をばさほど知らずともありなん。まづ家を保つ道を早く知りて守るべし。是れ人生至要のことなり。おろそかなるべからず。

一、家ををさむる主人は、日夜家事をよくつとめて怠らず、おろそかならず財を用ふるにおごらずつひやさず、もはら儉約を行ふべし。勤と儉との二は、家ををさむる要道なり。此の二の道行はるれば貧窮にいたらず、我が用に乏しからず。勤と儉と二の道を行ふに、心を小にしておろそかならざるをよしとす。是れ勤儉を行ふ心法なり。

一、勤儉なれば必ず貧窮にいたらず我が財祿にて家をたもち。財を人にもとめ借らずして足りぬ。人の貧窮をすくひ、音信贈答饗應の禮義をととのへ、其上餘蓄ありて不意の禍にあへる時の變に備へ、武具を調へ武事に備へあるは、

是よく財を用ふるなり。

一、家を保つるの道は、勤と儉との二にあり。四民共に勤むれば、家業よくをさまり、財祿を得るの基もととなり、又家業よくとのほり家をさまる。勤むるは是財祿を得るの本なり。本はつとむべし。儉約なれば、財を失はずして家をたもつ。儉約は、財をたもちて失はざる道なり。二の者ならび行はれて家道立つ。一も缺くべからず、四民皆同じく是を行ふべし。又勤と儉との工夫は忍にあり。忍はこらふるなり。苦勞をこらへてよくつとめ、私欲をこらへて儉約を行ふべし。

一、飲食衣服家居器物いへらうつはものなど、我が身の分よりかるくするがよきほどなるべし。身上に相かなへりと思ふは分に過ぎたるなるべし。只親を養ふは、本に報ずる道なれば、我が身を忘れて財を惜むべからず。又禮義を行ひ、人をすくひ助くることは、分に隨ひ力を出すべし。財を惜むべからず、是れ人をあはれみ人に交る道なればなり。

一、家の破れたる所は、はやく修理し、武具をととのへ備へ、ふるくして損じ

たるは改め補ひ、父よりゆづれる器などの缺け損じたるは、はやく修復すべし。凡小破の時修理を加へざれば、大破にいたりてはむづかし。

一、仕ふるものは、君より賜はる祿あり農工商は得たる田地あり家財あり。士も庶人も、其の財祿の多少によらず、其の分内にて儉約を行ひ、家人を養ひ家をたもつべし。是君父よりうけたるのみならず、天より賜はる所の定分の財祿なれば、大身小身貧富ともに、其の家の財祿を用ひて事足りぬべし。是天命を安んじて外を願はざるなり。已むことを得ば、外の財を借り用ふべからず。もし家祿の分限に過ぎてつひやせば、必ず財不足して、外に借り用ふるにいたる。是れ財を用ふるに法なくして、天命をやすんぜざるなり。よく財を用ふる人は、財祿の多少によらず、其の家に得たる所の財祿の分量にて事足りぬ。家の困窮するとせざるは、家祿の多少によらず、又時の風俗の奢おごれると儉なるにもよらず、又我が幸不幸にもよらず、只我が一心の儉なると、怠り奢れるによれり。以約失之者鮮矣と、聖人ののたまへること信ずべし、是家をたもつ法なり。

○以約云々の語論語里仁篇に出づ。

一、古人の財を用ふるは、其の財祿の分限に應じて過分の事なかりしかば、困窮する人すくなし。後の人は、分限に過ぎて、下士は上士のまねをし、上士は大夫のまねをし、大夫は諸侯のまねをす。事によりて、士たるもの甚分はなだぶんをこえて、諸侯のまねをすること亦多し。かくのごとくならば、なんぞ困窮せざるべきや。事により、上より下にひとしくかろくするは害なし。下より上を僭せえして、貴き人のまねするは、大なるとなり。

一、財を用ふるに小をつんで大にいたるゆゑ、小の費つひえをもをしむべし。然れども、もし已む事を得ずして、少しの者はなすとも大なる害なし。一時に大に財を用ひんとおもはば、必ず猶豫してよくはかるべし。已むことを得ばこらへて費すべからず。少しの費をつんで百にいたりても、猶大なる費一事は、それより甚しく財をやふる。つゝしむべし。

一、家ををさめ、財を用ふるに事ごとに心を用ひて精しくし、こまやかにして疎略なるべからず。おごらずやぶさかならず、過不及くわふきふなくよき程にすべし。用ひ過すはおごれり。不及なるはやぶさかなり。心あしくして、大やうにある

そかなれば、財の用ひやう不過及にして、或はおごり或はやぶさかなり。與ふべきものを與へず、與ふまじきものに與へ、多く與ふべき者にすくなくし、すくなかるべきに多くするは、事そむきて理にあたらず。是れ心を用ひず、用ひても精しからざるなり。

一、君より祿と位とを得るは誠に難きことなり。されど、得る事かたきよりも、たもちて失はざること尤もかたし。祿位ろくゐを得ることは、幸にしても得る人あり。財祿をたもつてうしなはざること、徳なければ成りがたし。幸ありて得れども、徳なくして失ふ人おほし。故に財祿ある人は、徳行をつゝしんで其の財祿をたもつべし。又財祿をむさぼり、分外の富を求めて子孫にのこさんとなんより、家法を正しくし、子孫に道のをしへをのこすにはしかじ。子孫無道なれば、財祿をのこせども必ず失ふ。四民皆かくの如し。我が財祿をたもちて失はず、子孫長久ならしめんことをねがはば、只仁心を以て人をあはれみめぐみ。善を行ふをつねの樂とし、子孫に善ををしへ勸むべし。是天道にかなふ理なれば、當時目に見えたるさいはひなくとも、後に必ず天のめぐみをうくべし。

是れ萬金を捨てて神佛にへつらひいのるに百倍せる祈禱なり。これ我が私言に
あらず、いにしへのかきこき人のをしへ、古今のためし明かなり。うたがふべ
からず。

一、財を用ふる法を、禮記の王制にいへり。曰く、財用を制するに、入る事は
はかりて、出すことをなす。言ふこゝろは、年の暮に、今年得る所の財の分限
をかぞへて、其の分限の多少にしたがひ、其の年の豊凶によりて、それに應じ
て、來年までつかひ用ふる分限を定めて、時々にかへりみて、つかひ用ふるこ
とを節にすべし。得る所の財の分量よりすくなく用ふるはよし。得る所より
過ぎて多ければ、財不足して困窮となる。いましむべし。是を、入るをはかり
て出すことをするといふ。其上、費をはぶきおごりをいましめて、成るべきほ
ど餘財を多くたくはへ、凶年、火災、盜賊、疾病、死亡、軍用に備ふべし。是
れ萬世財を用ふるの良法なり。

一、いにしへは三年耕して、必ず一年の食ありといへり。此の意は、農人は
三年田をつくれれば一年の食の餘計あり。たとへば、四町の田地をつくれれば、三

町のふるまひをなし、一町のなりはひを残して用ひず。三年過ぐれば、三町の
なりはひの餘計出でくる故に、たとひ水旱風蟲の凶年にあひて、五穀みのらざ
れども飢饉の患なく、財用事かけず。士と工商の家も、此の計をもつて知
るべし。是を以てはかるに、いにしへの法は、士は君より賜はる所の祿を、毎
年四にわかち、三分を用ひて一分をばたくはへ置きて用ひず。一分を三年かさ
ぬれば三分となるゆゑ、もして凶年にあひ變にあひても、困苦のうれひなし。
三分の一をたくはへ置くは、凶年のため、或は、水火盜賊不意の變をたすけ、
又軍用にそなへ、人の困窮をすくはんがためなり。是いにしへ財を用ふるの法
なり。此の法を行へば、四民ともに財ゆたかにして、貧窮のうれひなし。是古
今通用すべき良法なり。

一、凡そ太平の世の勢は、年々に萬の事必ず華美におもむきておごり、つひ
え多くなりもてゆくものなれば、儉約をむねとして行はずして只其のまゝにて
世の成行にまかせぬれば、人々困窮して家をたもちがたし。俗にながれ時にう
つりゆかば、儉約の道立たずして、後には、必ず家をやぶるにいたるべし。家

満てるをかきて、我がため子孫のため、禍をのがるべし。是これみづからさいはひ自福をうけ過すくさずして、子孫に福をのこしあたふるなり。是れ智者のする所なり。

一、財を多くたくはへて餘りあらば人に益あることにつかひ用ふべし。無益のいとなみをなして、財をつひやすはいたづら事なり。をしむべし。君子の財をみだりに用ひずしてをしむは、人に益あることに、財を用ひんがためなり。たとへば百萬錢をつひやして萬燈をともしより、十萬錢を出して、飢ゑたる者萬人を養ふは益多し。又百萬錢を出して、女子を嫁せしむれども、十萬錢を出して子を教ふる人なしと、古人いへり。又大富の人は、一日の内にも千金をつひやして、無益の驕樂けうらくをなせども、百金を出して飢ゑたる人をすくふ人なきは何ぞや。

一、我が身の養をうすくして、父母の奉養をあつくすべし。次に兄弟親戚朋友の貧窮なるをすくふべし。その外、飢寒艱苦する者をたすくるを以て樂とすべし。親戚のむすめ、嫁すべき時にいたれども、貧窮にして嫁する力なき者あり。吾もし力あらば、財をたすけて嫁せしむべし。凡そ財あらば、是の如く有益の

○利生。衆生を利益するの義。

事をなすべし。財を吝そしむべからず。我が力にしたがひてほどこすべし。斯く善を行ひて人をたすけば、家富み財おほく持てるかひあり。善をすること斯くのごとくならば、豈たのしからずや。道理を知らざる人は、多くの財をつひやし無益の事をなして、義理にそむくこと多し。財寶を多くつひやして、道理にそむくはむげに愚おろかなり。よくわきまへて、無益の事に財をつひやさず、益ある事に財を用ふべし。かくのごとく、善を行ひて人をすくふ人は、必ず天道の御めぐみ深くして、わざはひなく福長さいはひながし。無益の祈禱をして、みだりに神佛にへつらふには、はるかにまさりてしるし大なり。無智の人は此の理をしらず。道なくて神佛にへつらふは、神佛を愚にし、私ありとして、あざむきあなどるなり。何ぞかゝる人に利生りしやうあらんや。

一、凡そ財をしみては、善を行ふこと成りがたく功を立つることも成りがたし。又人の心を得ずして、人思ひつかず。人の和くわなきゆゑ事を成しがたく爲すことはかゆかず。軍にも、賞を行へば士卒身をすて勇戦をはげます。三略にも、香餌かうじ之下のもとには懸魚けんぎよありといへり。賞うすければ士卒はげみなく、軍功も立

○三略。兵書

ちがたし。是皆吝嗇これみはりんしよくのわざはひなり。俗語に、小欲大損と云ふ是なり。

一、人もし富貴にしてたからを多く貯へもたば、是天より我一人にあつくし給ふにあらず、多く人をすくはしめんために、我にさづけたまふとおもひて、天命にしたがひて、つねに仁愛の心もちて、貧苦なる人をめぐみ、飢饉する者をすくひて、善を行ふを以て樂とすべし。是天の御心にそむかざるなり。斯くのごとくならば、富貴なるかひありて、大なる樂なるべし。財を多くもちても、我が身ひとりの俸養におごり、人にほどこさずして善を行はざるは、無用の物なり。石瓦いしかはらを多くもてるに同じ。かゝる人を守錢虜せにをまもるやつこと古人の云ひけんもむべなり。財をもてるかひなくして、貧賤の人と同じ。

一、財を用ふる道をしらて貧窮なれば、父母をやしなふにうすく人に與ふべき物をあたへず、人を恵むことなりがたく、人のおひめをかへさず、廉恥の道行はれがたく、人の恵を受けてむくいず。官となりても、貧なれば民をむさぼりやすく、忠義をつとめがたし。禮義にそむき、心術に害あること、皆是困窮よりおこる。困窮は儉約ならざるよりおこれり。然る故に、儉約は、家ををさ

むる要道なり。

一、およそ人家になくてかなはざる物の外、無用の物をもとめたくはへざれば、心のわづらひなく、財のつひえなし。

一、器物は朝夕用うつばものあまゆふようある物を寶とすべし。無用の奇物を寶とするは、價は多く費えて、我が用にたつことはまれなり。常に用ある器は、價の費はすくなくて用にたつこと多し。得がたき寶をたふとぶは、古人のいましめなり。

一、士さぶらひとして、財利をむさぼり吝嗇にして廉恥の志なく、親戚故舊の貧窮をめぐまず、われにしたしき人、我が采地の農人などの飢饉を見ても、心つよくしてすくはず。親戚朋友の禮義をつとめず。或は、あたふべき者にあたへず、取るまじき物を取り、人の財を用ひてつぐのはず。もしこの事我が身に一もあらば、是をいましむべし。人のよきあしきを見るも、皆我が身のかゞみなり。善を見ては是を學び、惡を見ては我が身にも是ありやとかへりみるべし。如此すれば、人の善惡を見て、皆我が身の益となる。人の惡しきを誇らずして、我が身を省るべし。およそ鰥寡孤獨貧窮くわんくわどくひんきつにしてたよりなきもの、我が分にしたが

ひ、力の及ぶほどはすくふべし。これをすくふに財ををしむべからず。如何となれば、我身彼をすくふほど財あるは、天よりひとへに我が身にさいはひし給ふにあらず、貧苦なる者をすくはしめんとして、吾にたからをあたへ富ましめ給ふ理なれば、天の御心にしたがひて、貧人をすくひほどこそすべし。もし是をすくはざれば、天の御心にそむきて、其のわざはひおそるべし。天道にそむきしわざはひ、たちまちに目に見え來らず、其のむくい、おそけれどものがれがたし。此の理必ずたがはず、うたがふべからず。天道おそるべし。

一、易に天道は盈てるを虧くといへり。又物みつればかくともいへり。又、古語に、多く藏むればあつく失ふともいへり。財多くあつめたるまでにて、人の貧窮をめぐまざれば、盈ちては必ず虧くるわざはひあり。天道おそるべし。

一、人の器物を借ることを好むべからず。人を妨ぐることを遠慮すべし。入用ありとも、なるべきほどは不自由をこらへて人の器借るべからず。もし已むことを得ずして器を借らば、そこなふべからず。用ひをはらばはやく返すべし。久しくとどめ置きて、貸せるぬしに事を缺かせ、乞ひ使をうけておそくかへす

べからず。もし借れるもの損ぜば、よくおぎなひて、其の過を謝し返すべし。およそ我が家に、人の財寶器物書籍等を借りて、かへさざる物ありやと、時々みづからかへりみるべし。もし借れる物あらば、すみやかに返すべし。是亦家ををさむる道の内の一事なり。おろそかにすべからず。

一、物を買ひて、買ひたるおひめをわすれ、或はおこたりておひめを返さざることあらば、かへりみて早くかへすべし。是亦心を用ふべきことなり。

一、商人は日々月々に財をめぐらし用ひて、其の利を得るを以て、世わたるたつきとす。もし商人の物をかひて、其のあたひをおそくつぐのへば、商人其の財をめぐらさずして、利を得がたし。たとひ後日に残りなく返しあたふるとも、其のつぐのはざる間は、日々月々に得べき利を得ず。其の商人のうれひ思ひやるべし。大やうは、かはりの財なくば、不自由をこらへて物を買はざるべし。凡そ借れる物を返さず買へる物のあたひをつぐのはざれば、其財主のうらみおしはかるべし。人のうらみいかりつもりての天禍おそるべし。

一、人の書を借らば、まづ我が書をさし置きて、まづ人の書を專一に見て早

く返すべし。人の書をかりて、見ずして久しく留め置くはあてたりなり。大冊なる書も、二日に一冊は見やすし。中冊の書は、五冊からば五日に見て、早く返すべし。十冊借らば、十日に見て返すべし。久しくとどめ置くべからず。早く返せば、人も亦よく貸してをします。是學者の心を用ふべきことなり。

一、人の書を借らば、損そこなひ汚かすべからず。屋漏ふたり水けぶり、猫鼠ねずみ水火油膩あぶら、小兒のふせぎをすべし。借れる書は器に入れ置きて、見る時取り出すべし。もしそこなひけがさば、おぎなひて、其あやまりを謝して返すべし。是亦百行の一なり。

一、およそ人に書を貸せば、我が用ある時事缺けぬ。人に貸すことをしむべし。是を以て書を借れる人もんばかりて早く返すべし。貸す人は、借れる人の貧にして書なきをあはれみて貸すべし、をしむべからず。富める人、もし書を見ることをこのめども書を買はざれば學すゝまず。我が書にあらざれば、用ある時考へがたし。財多き人は、書を買ふこと惜むべからず。

一、我が身の俸養におごる人は必ず財ををしみて人にほどこさず。財多けれ

○百行の一。大夫たるもの行ふべきも。のろふべきも。いづれかの道。ほつといふ。

ど人にほどこさざるは、只吝嗇なるのみならず、不仁と云ふべし。財ををしみては、善は行ひがたしと程子ていしのいへる、まことにしかり。

卷之五

用財中

一、我が家の生業せいげふをつとめて、財を生ずるの本とし又儉約を行ひて、財をたもつ道とす。もし然らずして、家業に怠りてつとめず。財をみだりにして儉約ならざるは、是れ困窮の基にて家をやぶる。故に家を豊にし財を足すの道は四民ともによく家業を勤むるにあり。又財をたもちて失はざる道は、儉約を行ふにあり。凡そ士農工商、皆其家職をよくつとめて怠らず、是財を生ずるの本なり。又儉約にしてみだりに費さざるは財をたもつ道なり。此つとむると儉約との二は、よく家をたもつ道なり。利養を得ることは、あながちに貪り求めむさぼざれども、家業をよく勤むる中におのづからあり。此上に儉約を行ふべし。大富貴の人、家財かさい米多しといへども、財は限あるものなれば、儉約ならざれば後は必ず財つきてまどしくなる。我家にある所の財を顧みて使ひ用ふべし。家

財の有無を考へ知らずして、妄みだりに用ふるは、困窮の基なり。

一、家ををさむるは、國ををさむるに同じ。財を用ひ人を用ふ此二事をつしむべし。質實にして盗まざるやつこをえらびてつかひ、財をつかさどらしむべし。財をつかさどるやつこかだましければ、我が利慾のみいとなみて、主君をあざむきて主人の家をやぶる。財を用ふると人を用ふるとの二は、家ををさむるの要なり。心を用ふべし。

一、およそ人家の必ず貧しくなる事、天の禍にもあらず、人の不徳によれり。まづ後のうれひをおもんばからずして、堪忍の心なく、只今の口腹こうふく耳目じもくの欲をほしいままにし、儉約をきらひ、分限よりおごりてつひえをいとはず。このんで人の財を借り、おひめ多けれどもうれへず、買へる物のあたひをつぐのはずそれを乞ひもとむれば、いかりていよ／＼あたへず。日夜出遊びて、我が家に居ることまれにして、我が家事をつとめず、家の破損を修理せず、器物の損失をしらず。内に居ては、夜も臥ふすべき時ふさずして時を失ひ、朝はおそく起き家業をつとめず、つねにおこたりて時をつひやす。財の出入をしるさず、くら

○かだまし。
奸曲の意。

の内の財の多少を知らず、家事を家僕にまかせてみづからはからず。酒を好み
てほしいまゝにし、放逸ほういつなる無頼むらいの友にまじはり、遊宴を事とし、器物を好み
さま／＼の物ずきして、からのやまとの無用の物を多く買ひあつめ、色をこの
みてやまず、もろ／＼のすきこのむこと多し。無益の藝をこのみ、淫樂をこの
み、衣服のかざりをこのみ、美味をこのみ、饗應をこのみ、營作をこのみ、無
用の器をこのむ。斯くの如くこのみ多きは、すなはち是れわざはひを好むなり。
かくのごとくなる人は、必ず人のいさめを嫌ひて聞き入れず。是皆困窮の基な
り。

一、人家の富むことも又必ず故あり。其の品多し。只天の福さいはひにもよらず、其
の主人の行によれり。先づ家ををさむるに、よろづのことほしいまゝならず、
口腹耳目の欲をすごさず、私慾をこらへ、後日のうれへをおもんばかり、儉約
にみだりにつひやさず、分外のおごりをせず、家事をみづからつとめて下人に
まかせず、家財の多少有無をはかり、家業をつとめておこたりなく、朝ははや
く起き、夜はちそく寝ね、ちきふしに其の時を失はず、酒食をむさぼらず、買

へるものあたひをはやくつぐのひ、人の財を借ることをきらひ、我が家祿の
分内にて事足りて、外に求めず。財を用ふる事、我が家祿の分限に應じて過ぎ
ざる故に、財不足せずして人に求めず。もし故ありて財不足し、已む事を得ず
して人の財を借らば、心にかけて早くかへし、初の約をちがへず。衣食家居器
物の美をこのまず、物ずきをこのまず、氣に合はざるとてかる／＼しく改め作
らず、營作をこのまず、無用の器物をこのまず、無益の藝能をこのまず、およ
そこのむ事すくなし。このむ事すくなきは、則すなはち是わざはひを好まざるなり。斯
くのごとくなる人は、必ず人のいさめをよく聞き用ひてふせがず。

一、家をよく保つとよく保たざるとは、夫の徳不徳のみにあらず、又妻めかけの行の
善惡によれり。古人、家貧しうして良妻を思ふといひけんもむべなり。夫は外
ををさめ、妻は内ををさむるが職分なり。夫よく勤儉なれども妻もし放逸にお
こたりてつとめず、驕りて儉約ならざれば、家をたもちがたし。殊に貧賤なり。
家はひとへに妻のちからによつて盛さかえおとろふ。夫はつねに内に居ずして妻の
しわざを知らず、只妻にまかせ置きぬ。しかるに妻不徳なれば、財を失ひて必

○古人家貧中
史記魏世家
に「家貧なる
時良妻を思ひ
相亂るゝ時良
あり。」と

ず家をやぶる。故に上士以下、庶人の家をほろぼすは、多くは妻のとながなり。いましむべし。妻の徳はつゝしみておごらず、夫と姑しよとにうけたがひてわがまゝならず、もはら家事に心を用ひて身をへりくんだり、女工をよくつとめておこたらざる、是婦人の徳なり。かくのごとくにしてよく家をたもつべし。夫とされる者は愛におぼれず、必ず婦に教へて家を治めしむべし。

一、儉約を行ひて家をたもつ事、必ず早く慮りて行ふべし。行きつまりてはせんかたなし。たとへば、若き時より中年まで養生せず、口腹好色の慾ほしいまを恣まにして、晩年に至りて、漸く養生を慎まんとするが如し。慎まざるにまされども、衰へて後は益少きが如し。

一、財を用ふるに、人々身上に相應の分量あり是を節とす。節とはよきほどなり。節に過ぐれば奢しやとなり、節に及ばざれば吝りんしやくとなる。節を守るは中になふ道なり。

一、つひえをはぶきおごりをおさへて、家財の分限に應じて用ふべし。分限の外に越えて用ふべからず。おごりつひえをおさへて私慾をこらふるにはつと

めて力を用ひざれば爲しがたし。心よわくしては、欲にひかれて行はれず。又世俗のそしりをおそれては、儉約は行ひがたし。ちからを用ひて行ひ遂ぐべし。欲にひかれそしりを恐るゝは力量なし。欲にかつには剛を以てす。おそれざるは勇者のわざなり。

一、儉約にして財をつひやさゞるは尤も良法なり。然れども儉約を行ふに事よせて、財ををしみて禮義を缺き、仁愛をほどこさゞるは鄙ひけふ狭と云ふべし。儉約にあらず是吞齋とんさいなり、不徳なり。禮義をつとめて財を用ふべく、あたふべき時ならば、財をしましめていさぎよかるべし。又貧窮をすくふにおいては、財ををしむべからず。我が身には儉約にして、人に施すには財ををしまざるは、是善なり。我が身にはおごりつひやして禮義を缺き、人にほどこしめぐまざるは不徳なり。財ををしみては善を行ひがたと、古人いへり、むべなるかな。又無益のことに財をつひやしてをしまざる人あり。愚なりと云ふべし。無益のことに財を用ふるは、淵に捨つるに同じ。是善を行ひ人を救ふ道をしらず、其の志なき故なり。むげのことなり。およそ一とせの衣食の費は多からず、やど

りは茅屋一間に起きふして足りぬ。しもべは、我勞にかはる人の外はなくても事かゝず。うつはものは、只飲食の器、日用の調度のみ助となる。其外の器皆用なし。人の身をやしなふには、此のあまたの物にすぎず。これを備ふるは、さほどつひえおほからず。然れば財祿ある人、儉約をだに行はば、自俸するに餘あるべし。不足して人に乞ひ借るに及ぶべからず。然るに財用を多く費し過し、人に乞ひ借り、みづから困窮にいたり、一生身をくるしめ人を苦しめ、子孫まで困窮せしむるは悲むべし。是れ用財の良法を知らざればなり。

一、我が身の私慾をすくなくすれば、身をやしなひ自樂むに、多くの財をつひやさずして事足りぬべし。大富貴の人といへど、人にかはりて大に飲み食ふことならず。多くきぬをかさね著せず、大なる屋宅に居らずして、身を安くすしかれば身の養は、分外をねがはずとも事たりぬべし。

一、古の賢王は時々民に土貢をゆるし、人のともしきをすくひ、人に多くほどこし給ひしだに、其の藏に財穀みち／＼て、後は穀くさり錢繩くさりしとかや。今の卑賤の士、小祿の家も、儉約にして財をよく用ふる人は、財餘ありて

○自俸。己の
用を便じ以て
生を營むをい
ふ。

不足の憂なくして、人に乞ひ借らず。然れば、人の貧窮すると豊饒なるとは、財を用ふるに法あるとなきによれり。財の用ひやうよければ、貧も富むにいたる。用ひやうあしければ、富めるも貧しくなる。財を用ふるに心を用ふべし。

一、儉約を行ひ、おごりつひえをせず、華美をこのまですして、餘財をたくはへ置きて、或は凶年にあひ、もしは長病死亡の變、又婚嫁のつひえ、水火盜賊のわざはひ、殊に軍用をかねて備へ、すべて不慮の時の變、又は人の貧苦寒餓をすくふに備ふべし。餘財なければ不慮の變に應ずることかたく、人の困窮をすくひがたし。

一、借の一字は家を破るの基なり。此の一字をかたく禁ずべし。財祿の多少大身小身に随つて、其の分限の内にて、不足なきやうに財を用ふべし。ともしきをこらへて人に借るべからず。分限の外に用ひ過せば、必ず財足らずして人に借る。財を借れば、年々に利息を出し、其の利息に又利加はり、後につもりては、其のおひめおひたゞしくなり、必ず家産をやぶる。借りて利息を人にあたふれば、後は我が財は我が用にはたゞず、皆人にうばはれ人の物となる。を

しむべし。故に家をたもつのは、分限の外に財をつひやさずして、分内にて事足るをよしとす。いかに貧困にして自由ならずとも、力量を用ひこらへて、分外の事をなすべからず。如此せば、人にもとめずして足りぬべし。故に財ををさめて家をたもつのは、借ることを禁ずべし。少し借れば多く借るにいたる。多く借れば家をたもちがたし。借ることしばしにいたれば、後は必ず家を破る。然れども、故ありて財ともしき時、已むことを得ずして、人の財を借り用ひば、なるべきほどは、我が身と妻子の俸養を薄くして、艱難をこらへ、財をたくはへあつめて、借れるものを早くつぐのふべし。借れるものあまたつぐのはずんば、萬の俸養を甚かろくして艱難をこらへ、身をくるしめて財をあつめ、返さんと約せし期をたがへず、約にそむくべからず。

一、おぎのり買ふ物のあたひを、はやくつぐのふべし。人に損失をなさしむべからず。是信義の道を失はざるのみならず、家をたもつ良法なり。かくのごとく、艱難をこらふること堅固ならざれば、必ず貧窮をまぬかれずして、家を保ちがたし。

一、我が家をたもつ道に、富貴の人もみづから心を用ひ、微細のこともよくはかり知りてつゝまやかに行ふべし。むかしの人は、大名高家も、家事をみづからつとめ、微細のことにもよく心を用ひて、おろそかならざりしゆゑ、貧困に至らざるのみならず、餘財多かりしなり。今の人家にあらざれども、我が家事をむづかして、財用をみづからはからず、入ることも出すことも多少を知らず。只家のやつこにまかせてみづから知らざれば、家の計おろそかにして、分外の費多く、且やつこにかすめ取らるゝこと多し。如此なれば、家産足らずして終に貧困にいたる。小身の人にもかやうの家事におろそかなるもの多し。一生貧窮にくるしむといへども、我が家計にうとくおろそかなる故なることを知らず。只世の成行あしきと、我が不幸とのみ思へるはあやまりなり。我が身困窮にくるしむのみならず、人の妨となり、はては子孫の災となる。かなしむべし。

一、貧窮の時、艱苦を堪忍することつとめて守るべし。世の人、多くは家をたもつに法なく、儉約の道を知らずして、貧窮を堪忍することなく、後日のわ

ざはひをはからず、當時の欲にまかせて、分に過ぎて財を多く用ふるゆゑに、財たらず、古の人、我が身を儉約にし、萬よろづ不自由をこらへ、財をみだりにつひやさず、人の財を借ることをきらひて、ふかき恥辱とす。故に財を借る人まれなり。もし已むことを得ずして人に借れば、恥ぢて云はずかくしてあらはさず。今の人は、人の財を借ることをこのみ、人に借ることを恥ぢず、かへつて借る事多きを以てめいぼくとす。財を借りて、みだりに用ふる人を、無欲なり、心いさぎよきとて褒む。又儉約にしてみだりに費さず、人の財を借らざる人をはかへりて吝嗇なりとて譏とがる。世こぞりてかくのごとき風俗となれり、習ひて風をなせり。一人のとがにはあらず。されど人々我がとがぞと思ひて、身にかへりみて道を行ふべし。是儉約と吝嗇との善惡をわきまへざること、雪と墨とを見分けざるが如し。愚なりと云ふべし。

一、我が身に俸ずることはうすくして、人にほどこし禮義を行ふ事をあつくる、是用財の良法なり。今の人は、我が身に俸ずるにはおごり、人にほどこし禮義を行ふにはうすくす。是用財の道をうしなへり。

○めいぼくは
面目と云ふ義

一、我が財祿の分限をわすれ、後の困窮を考へずして、當時の嗜慾しよくにまかせ、分に過ぎて財を用ふれば、必ず財足らず。財不足するによりて、廉恥の心なくつとむべき禮義を行ひがたく、人の困苦をめぐまず、あたふべき物をあたへず奉公をつとむべきちからなく、軍用にともし。是家をたもち財を用ふる道を知らざればなり。然れば貴賤ともに、家ををさむるには、必ず財の用ひやうを知るべし。是れ人世の尤も切要なる急務なり。

卷之六

用財下

○事ゆかず。
折合つき兼ね
るの意。

一、親戚朋友に對し、財をやりとりする時、我が財を損ぜざるやうに、我が利運のごとくせんとすれば、快こころよからざることあり。取るにも遣るにも、我が財を少し損失するをいとほざれば、何事なく、我も人もたがひに心よし。我が得分にする道理ながら、其の理非を論じ、少しの財のためにあらそひて、人をとがめて人の心を失ふこと多し。人に財を貸して其のおひめをとるも、全く我が損失なからんとすれば、事ゆかずして行おこなはれがたし。少し我が財を捨つれば無事にしていたづかはしからず。是わづかのつひえ、家のため少しも害なし。

一、人と交るに、遠慮ふかくして、人の財を費つひえさしむべからず。人のつひえをいとはずして、己れにつひえなからんとし、人のつひえを以て、我が身の樂とするはいやしむべし。およそかやうのことは、我が心術しんじゆつの害となれり。かへ

りみていましむべし。萬の事うるはしくとも、財をやりとるに廉直れんちよくならず、むさぼりあれば、むげに人におもひくださるゝものなり。

一、親戚故舊朋友のまどしき者、我が財物を借らば我が力にしたがひて財を與ふべし。貸すべからず、與ふれば、我が仁愛の道行はれて、我が心こころよに快し。彼も我が恩に感ず。およそ、借るものは貧しく財なき故にかる。借りて返せばいよくまどしくなる故に、きはめて廉直の人にあらざれば、かへすことまれなり。初貸はじめささるうらみは少しにして、借りて後かへさざるをこなたより乞ふ時、借れるものうらみは甚ふかし。したしき人には、ことさら財を貸すべからず、成るべきほどはあたふべし。財を貸すはわざはひをもとむるなり。後にはたがひにうらみ出來、中うとくなること多し。いやしき俗のうたに『しる人に物ばし貸すなたゞやりね、貸さぬうらみは乞ふほどはなし』といへり。貧窮なるものは、借れる財を償ふことならず、後にかへさんとおもへども、其の時過ぎぬれば忘れやすくして、つぐのはんことを思はず。いやしき歌に、『うきこともうれしきことも過ぎぬれば、其の時ほどはおもはざりけり』とよめる



が如し。我が身の難儀なる時、人のめぐみを受けて、後まで忘れざる人はまれなり。然るに、其の借れる財のおひめをつぐのはざる時、此方より乞ひ求むれば、財を借りたる者うらみいきどほりて、中絶ゆるにいたる。或はうらみふかくて、あだかたきとなるにいたるもあり。こなたより責め乞はざれども、借りて返さざるものの方にひが事あるゆゑ、親戚といへども、必ずわれにそむきて疎くなる。いはんや朋友他人はさらなり。是れ財を費してかたきを求むるなり。かねてよく慮るべし。

一、親戚朋友に、已む事を得ずして物を貸さば、初よりあたふると心得て借すべし。借れる時はよろこべども、時過ぎぬればめぐみをわすれて返さず。其の時かねてあたへたると心得ぬればうらみなし。貸せる物を必ず得んと思ひて責めはたれども、かへさざれば、いかりて中絶ゆるは世に多きならひなり。かねて其の心得ありて、貸したる物を必ず得んとおもふべからず。貸せるものを必ず得んと思ふは、人情を知らざるなり。かへりて返さざるは、世俗のならひなりと心得べし。いかるべからず。

一、衆人は儉約の善なることを知らず。儉約なれば、吝嗇なりとてそしりわらふは、世俗のならひなり。愚なる人は、世俗のそしりを誠と心得て雷同す。世俗のそしり信ずべからず。世俗のそしりをおそれ、儉約を行はざるは力量なし。されども儉約の道を知らて、心鄙細にして、財を惜むこと過ぐれば、心せはしく、あたふべき物をあたへず、用ふべき財を用ひずして、仁愛をうしなひ禮義にそむくゆゑ、人の和を失ひて、人おもひつかず、何事を行ふものはゆかず

一、凡そ財を用ふるには、心を用ひて、よき程の節にかなひて過不及のあやまりなかるべし。用ふべき時は用ひ、あたふべき時はあたふべし。をしむべからず。君子の儉約を行ふは、用ふべき時用ひんがためなり。費をしむこと過ぎて中をうしなひ、心せはしくして、わが樂み人の和をうしなふべからず。

一、儉約は人の美德なり。いにしへより、いみじき聖賢明王、皆儉約を行ひ給へり。よき人の儉約ならざるはなし。俗人は、皆儉約をさらひて鄙吝なりとす。儉約は、我が身に俸養する事をうすくして、おごらざるを云ふ。是善徳なり。

吝嗇とは、をしむともやぶさかとも讀む。財をしみてあたふべき人にあたへず、用ふべき事にも用ひざるを云ふ。是は惡事なり。此わかちを知るべし。愚人と下部は、儉約を吝嗇と思へり。

一、君子はみだりに財を費さざる故、餘財ありて人を救ひめぐみ、財を用ふべき事には惜まず。小人はおごりて、濫に財を費せども、人をすくひ惠むことは、財をしみて施さず。故に奢りてみだりに財をつひやす者は、必ず財をしみて人をすくひ惠まず。

一、農商の家、父のゆづりを受けて、田地と財寶とを得て、よくたもちて失はずして、子孫にゆづるも孝なり。家業をよくつとめておこたらず、儉約にしてみだりに財をつひやさざれば、永く父のゆづりを保ちて子孫に傳ふ。孝と云ふべし。是を良民と云ふ。もし怠りてつとめず、財をつひやしうしなへば、田をうり家を失ひ財をやぶりて、困窮にいたる者多し。不孝の甚しきなり。是を頑民と云ふ。

一、管子が曰、人惰而侈則貧、力而儉則富。およそ人家の貧しきは、惰りて

修るによれり。富めるは勤めて儉なるによれり。此理をよく心得べし。故に、家をたもつには、勤儉の二を行ふべし。是要道なり。

一、家をたもち財を用ふるに、人の生れつきによりて此の道を得たると得ざるとあり。心あらくして精細ならざる人は、此の道につたなし。かゝる人みづからかへりみて、我が得ざる所をあらため正すべし。生れつきにまかせ置きて行へば、必ず困窮にいたる。

一、大に富める人も、財を用ふる道知らざれば、後は必ず貧窮に苦しむ。薄祿の家も、財を用ふるに道あれば貧苦なし。賢き人は國天下をだによくたもつ。況や小なる家をたもつこと成りがたきはつたなし。然れば、家をもてる人は、財を治めて家をよくたもつ計をむねとして、心にかくべし。今の人多くは家をたもつ計を知らず、貧困にいたりぬれば、世のならはしと、我が不幸をとがめて、我が過をかへりみず。世をとがめて我が身をゆるす人は、此の道は行ひがたし。家の困窮するは、ひとへに我とがごと心得て、みづからかへりみ身を修むべし。

一、財はかぎりあり、私欲はかぎりなし。かぎりなき欲にまかせては、必ず財つきて困窮す。富める人も貧しき人も儉約にて、物ごとに嗜慾をこらへ、酒食衣服家居など、よろづの用、我が身上よりかろくうすくすると見ゆるが、理にかなひて能きほどなるべし。殊に貧家はかくの如くにして、やう／＼我が得る所の財祿を用ひつくして、あまりなく不足なし。不足なければ、小祿の家も人に借り求むるに及ばず。然るに、萬の身の俸養分限に過ぎて、心にまかせぬれば、富豪といへども後は財不足し、みづからくるしむのみならず、人の妨となり、一生の苦み、子孫の不幸となる。貧家は、人にほどこし貧窮をすくふほどこそなくとも、せめて人の妨とならざるべし。

一、貧窮にして其うれひたへがたしといへども、よく貧をこらへて、習ひ熟すればくるしみなし。凡ての事、なる／＼となれざるによりて、苦み樂みあり。

一、堯の時八年の洪水あり。湯王の時七年の旱ありて、野に青草なかりしかども、民うゑず、道に乞ふ人なかりしは、かねて蓄あればなり。士庶人のいやしき家、たくはへなくんばあるべからず。人家には不意の變あり。財のたくはへ

なければ、俄に變にあひてはすべきやうなし。かねてより早く變に備ふるはかりごとを爲すべし。

一、後の事遠慮なき人は、當時身のやしなひにおごり、酒食をゆたかにし、家居をよくし、衣服をかざり、欲をほしいまゝにして費をしまさず、財つきぬれば人に借ることをうれへず。財を貸す人だにあれば幸にして、おほく借ることをこのむ。是れ眼前を快くして後の災をかへりみず。然るに只今さへ我が財なくして、人に借り求むるほどなるに、借れる財に、年々利息くはゝりゆけば、いよ／＼財つきて、借れる物をつくのふべき力なくて、必ず家をやぶる。初に早く後の事をおもんばかり、後の憂なき計をなすべし。

一、はじめ貧しく後富める人、はじめのまどしき時を忘れずしておごらざれば永く其の富をたもちて失はず。はじめいやしく後貴くなりたる人、はじめのいやしき時をわすれずしておごらざれば、永く其の貴をたもちて失はず。

一、我が父、人の財を借りてかへさず、又買ひたる物の價をかへさざる是父のひが事なり。其の子たる者、我がかへすべき力にあらば、年久しくへだた

りぬとも、其のかし主と賣れる主をたづね求めて、我が財を以て父の借れるおひめと、買へる物のあたひを、滞りなくつぐのひ返すべし。是を父の過を補ふと云ふ。孝の道なり。父の時、人の財をかへさず、あたひをかへさざるは、我が心に快からず。又貸主賣主も、財を失へるうらみふかし。然るに是をかへせば親の過を補ひ、我が心を快くし、かし主うり主のうらみ無くする、此の三の益あり。必ず我が身の養をはぶきつひえをやめて、父のおひめをつぐのひかへすべし。かくのごとく孝を行ひ、道を直くしてあはれみある人は、其の故とは目に見えざれども、必ず後に天のむくいありて、ひそかにめぐみたまふ理あり。君子は、其のむくいを心にかけて善を行はざれども、其のじねんのしるしは必ずある理なり。俄に目に見えざるとて、此の道理あるをうだがふべからず。

一、財を用ふるに心を用ふると用ひざるとによりて、財の費の多少甚しきことなり。よく心を用ひて無用の費をはぶき、つゝしみて約なるべし。おろそかにして多く用ふべからず。たとへば養生の道は、物ごとにすくなくするをよし

とす。酒食をすくなくし、色欲をすくなくし、言と怒をすくなくするの類なり。財を用ふるも亦、此の如くなるべし。物ごとに多く用ひ過すべからず。然れども、費ををしむことあまり緊密にすぐれば、我が心を苦しめ人に害あり。緊密なる内にゆるやかなるがよし。人をつかふも亦かくの如し。日々少しのいとまなきやうにつかへば、人くるしみて其の所を得がたし。少しいとまあるやうに人をつかふべし。

一、おごりてほしいまゝなる人は、三年に用ふる財を一年につひやし盡くすたとへば無養生なる人、欲をほしいまゝにすれば、百年の元氣を一時にへらし、身を失ふが如し。

一、山谷が詩曰 深念煩鄰里 忍窮禁貸賒 此詩の意は、人の財を借り人の物をおぎのり買ひて返さざれば、我が郷里人のわづらひとなるをふかく思案して、身の艱難をこらへて、人の財を借らず人の物をおぎのらずといへる意なり。家を治むるの道かくの如くすべし。財を貸したる者、物を賣りし者のうれひうらみをおもひはかるべし。むかしの人は、家まどしけれど、艱難をこら

○山谷。黄山
谷。有名なる
詩人。

へて、我がもてる家財を以て家をすぐして、人の財をからず。故に今時の如く人ごとにまどしきうれひなし。或は小祿の人も、財のたくはへありて、不慮の時の變にそなへしなり。今の人はおごりつひやして、必ず家財不足す。時の風俗にならひて、當時の欲をほしいまゝにして、後のうれひをおもんばからざるなり。

一、人心はかりがたし。士といへど忠信なき人は言ふことうけがふこと信じがたし。いはんや庶人はならはしあしくして信義なし。我が心のごとく信あらんと思ひて、ゆだんして人をゆるせば、おほくは約ちがひて人に欺かれ、後悔することあり。殊に財をあづけさづくる事、はじめにつまびらかにしておろそかにすべからず。小人は、必ず人をあざむき財をうばふことをこのむ。其はかりごとにおつべからず。萬の事、はじめに慎まざれば、かならずをはりに悔あり。

一、貧家に男子多くば、かねて早く産業を立つる計をなすべし。貧家に女子生れば、早く心づかひて嫁する時の装具をととのふるはかりごとを爲すべし。

女子生れし時、杉を萬根うゑて、其の長ずる時、ひさぎて嫁する助とせしためしも有り。桐を多くうゑて、女子の装を助くる者、今もあり。後の事をかねて早く計りて、俄につまづかざる謀をなすべし。家まどしくてかねての用意なければ、女子の嫁する時にのぞんで、俄に其のつひえの財を求め得ることかたし。

一、老人は早く棺をこしらへ、葬具をそなへ置くべし。富貴の家も、其の時に及んで俄に調へがたき物あり。ことに貧家は早くそなへざれば、時にのぞみ器物を沽却し、錢財を借り求めて用脚とすれども、俄に禮そなはずして、事ととのひがたし。かねて早く心にかけて備ふべし。

一、貧しき人は貨財を以て禮とせず。老いたる人の、筋力を以て禮とせざるが如し。もし貧賤ならざる人は、贈物を以て其誠をあらはす。是古人のなせる所、禮の道なり。父母兄弟親戚朋友、或は恩をうけし人には、贈物を以て其の誠をあらはし、其の情を通ずべし。古人、貧しきは束脩をおくり、富めるは玉帛をおくる。吝なる人は、財を惜みて禮なし、おくるべき人におくらず、是吝

齋なるは、不仁にして誠なきによれり。いかんとなれば、我が子には多く財をつひやせどもをしまず。是れ愛ふかければなり。しかれば財ををしてみて贈答の禮なきは、不仁よりおこる。いはんや贈物にさほど財のつひえなし。

一、人におくり物するは、心を用ふべきことなり。すべてあしき物を贈るは贈らざるにおとりてはづかし。魚のあざれ、肉のやぶれ、饅餌醬醢などのつくりなせる物、味變じ色あしく臭あしき、又菓など、いまだ熟せざる物の時ならずして人に害あるもの、皆人に贈るべからず。贈物によりて人の心のうすきあつきあらはる。下部に任せてはうしろめたし。みづからえらぶべし。

一、家人をつかふに、只ことばの情ばかりにて、賞祿を與へざれば家人の心悦服せず。財祿をあたふれば悦んでよくつとむ。一時に多くあたへんよりは、少しづつ時々あたふれば、おこたらず。多くあたへて久しくあたへざれば、めぐみを忘れておこたる。ことばの情のみにて物を與へざれば、婦人の仁とて、實事なければ人まことをつくさず、功をなしがたし。軍をするにも、言の情ばかりにて祿を與へざれば、士卒の戦功なし。然れども、財祿を與ふるにも法あ

○あざれ。肉などの腐敗する事。

り。みだりに功なきに與ふれば、千金を與へても人よろこばず、又一言の情も千金にまざることあり。

一、儉約にして、我身におごりなきをば徳と云ふ。人これをよろこぶ。もし人に對して、財ををしてみ、人にほどこさず人にうすくして、禮にあたらざるをば、人皆いやしみそしる。是れ不徳なり。吝嗇と云ふ。儉約をあしく心得て吝嗇とする者あり、儉約に事よせて吝嗇なるものあり。皆不徳なり。

一、東坡がいへる蔬食の三養あり。蔬食とは、味の淡薄なるものを食するを云ふ。一には、分を安んじて以て福をやしなふ。是はおごらざるなり。二には、胃をゆるくして以て氣をやしなふ。是は肥濃なる美味を多くくらへば、胃の氣をやぶる故なり。三には、費を省きて以て財を養ふ。是は淡薄なるものは財の費なきなり。是亦家をたもつに益ある法なり。

一、ひろき家に居ては、むかしの穴に住み野に居りし時と、今のまどしき人のはにふの小屋のいぶせきをおもひやりて樂しむべし。穀肉を食しては、むかしの人の、木の葉草の根を食とせしと、今の餓になやめる人をあはれむべし。き

○はにふ。屋ぶきの家、茅藁

ぬを著てあたゝかにしては、むかしの木の葉をつゞりて著たると、今の衣なくしてこゝゆる者をあはれむべし。わがめしつかふ奴婢あらば、貧しき人の水くみ、みづからかしく苦を思ふべし。かくの如くならば、樂多くして、上をねがふ外の求めなかるべし。

一、凡そ家をたもつ道は儉約を行ふにあり。儉約とはおごりと費なきなり。

驕おごりとは何ぞや。我分わがぶん外ぐわいを行ふを云ふ。費とは何ぞや。無用の財を用ふるを云ふ。又家をたもつには、豫かねてするを先とすべし。かねてするとは、後の事を早くおもへばかりて用心するをいふ。かねての計はかりごとなくしては、行きあたりて如何ともすべからず。遠おちんばかりき慮はかりなければ、必ず近ちかき憂うれあり。聖人の言ことばたがふべからず。

右家道訓六卷者。益軒貝原先生之所著也。先生今年八十有三歳。而孜孜讀書。

諄々授徒。可謂老而益々壯者矣。予以販書。出入先生之門有年。仍乞此

書再四。遂登梓以公于世焉。豈啻家道之訓哉。自家傳家庶幾於國家治教

之方。亦未必無小補云。

正徳二千辰年孟陬穀旦

書肆 柳枝軒茨城信清謹書

齊家論

ありべかり

解題

齊家論は我國、心學道話の始祖たる石田梅巖の著にして通俗平易に齊家の要を説き民衆教化に資したるもの、梅巖は丹波の人、名は勘平、幼にして京都に出てて商店の丁稚たりし傍ら儒佛の學を究めて、悟る所あり、享保十四年京都車屋町に道場を開き、其の門の柱に『何月何日開講、席錢入り申さず候無縁にても所望の方々は御遠慮なく御通りお聴きなさるべく候』と標示して傍聽自由に通俗談を試みたので、本書は、それより十五年を経過した時の著て思想最も圓熟の感がある。延享元年六十を以て歿す。

ありべかりは梅巖の門人手島堵庵の著す所にして問答を設けて巧みに心學の旨を説く堵庵は京都の商人にして初め近江屋源右衛門と稱し、後、隱居して堵庵と號し、梅巖歿後奮つて斯學の傳播につとめ、これを一般に普及するに至つた功は歿すべからざるものがある。天明六年を以て逝く、此二書は共に身、庶民の間に起りて民衆教化に従事したる心學道話の先驅ともいふべきものである。

齊家論

石田梅巖著

上の卷

序

實に、年月の過ぐる、早き事は、たけき川水の流るゝがごとく、止まる事なし。予、講釋を初めんと志し、何月何日より開講、無縁のかたゝにても、遠慮なくさかるべしと、書付けを出せしも、はや十五年に成りぬ。其頃、書付けを見て、『殊勝なり。』と、いふ人もあり。又、『あの不學にて、何を説くや。』と譏るもあり。或は、面向は譽むれども、影にて笑ふ人もあり。其外、評判まち／＼なりと聞く。予、晩學の事なれば、何を覺えし事もなく、行跡も、好きな人に似ることあらば、しかるべきに、それもいよく、及びがたし。然るに何を

○十五年。梅巖の開講は享保十四年なれば此時は寛保二年である。

孝行と儉約

○沙汰。評判
○板行。書物
を出版して
世に刊行し
弘むるに
同出

寛保元年秋の比、門弟の中、來りて云ふ。「武藏國に、薪木賣長五郎といふ、孝心なる者あり。江戸表は、これ沙汰にて、則ち其趣き、板行にあらはれし。」とて、見せられけり。曰、武藏國多摩郡府中領押立村に、長五郎といふ小百姓あり。其身貧しく、妻にもはなれ、八十八歳になる母を養ひ、其外、子供にもせがまれながら、母を大切にやしなひ、孝をつくせしゆゑ、公の御惠にもあづかりしとなり。此長五郎、貧しき百姓、薪賣の事なれば、學問の徳にて、孝行したりとも、見えざれども、天下萬民、聞き知る程にはなれり。門弟中にも、是までは、文學なくては、學問の甲斐なきなど、おもひし者も、長五郎が事を聞き、いよく吾言とて、同心するこそ、有がたき。

又去んぬる年、門弟、一書を持來り、見せられけり。題號は、「越後孝婦傳」とあり。曰越後國三島郡出雲崎尼瀬の大工作大夫が女房は、姑に孝行なるもの也。夫作大夫も、孝心なるものなれど、世のいとなみの、やるせなくて、他國

かせぎに出るゆゑ、女房ひとり、七十にあまる姑を介抱し、孝行をなし、是を御惠にあづかりしよし、板行にあらはれ、普く天下にひろまるは、有がたきにあらずや。

元來、假名ものなれば、講釋するに及ばざれども、京、大阪、大和、河内にて、講釋の上にて讀み聞せり。其意は、かく孝行すれば、天下に知られ、好事と思ひ、名聞に成りとも、孝行がさせたく思ふ所なり。

天子より已下、庶人に至るまで、孝、終始なきときは、患ひ及ばざる者は、いまだこれあらじ。又、地の利に因り、身を謹み、用を節にして、以て父母をやしなふは、諸人の孝と、孝經に説きたまへり。それゆゑ、常に、儉約の事を説きさかせ、門弟へは、月次の會に、折々儉約の題を出し、「得心あるや。」と、こゝろみれども、是までは、志も立たざりしが、五六年より、十四五年も、從へるしるしにや、去秋、町家の門弟、志を起し、來りていはく、「我く、年來、教をうくるといへども、家を治むるうへに、心得たがひあり。今般、家を治むるは、儉約が本となる事を得心せり。其本立つときは、奢りもやみ、家も

○名聞になり
たもの名聞は
たの孝行に非
眞の孝行に非
ざるも眞似か
ある故に入ら
さすべく思ふ
○天子より已
下。天子より
人。天子より
孝。終始なく
て。患へ及ば
ざるものあら
未だこれあら
た。地の利を
分ち、身を謹
しむ。父母を
養ふ。孝を
庶人の孝な
り。庶人の一
般に同じ。一
用を節にして
約とは費用を
節

○約を守る。節約を守る事。

齊ふべし。家齊ふれば、おのづから、親の心を養ふ孝行となり、其外、出入の者も、心安く恵まるべき理あり。他の奢り筋にて、當分、親の心をなぐさむる事も有るべけれど、約を守らざれば、段々、内證に不足立ち、諸事のまはりあしくなりて、借金せば、つひには、親の心をくるしむるに至るべし。尤も是までも、内證の事は、約を守る志あれば、つとめ來りし事もあれど、衣類などは、表向の物にて、世間なみの事なれば、心付なく、うか／＼とくらせし所、能々考ふれば、分に過ぎたる衣裳を、是非に着よと言ふものは、なき事なり。其外、儉約筋諸事、親しき門弟示し合せ、急度あらため、家内にて行ふべし。」といはれけり。

殷の紂王、始、象の箸を爲る時、箕子、慨歎して、「彼、象の箸を爲り給はゞ、必ず玉の杯を爲るべし。玉の杯を爲らば、必ず遠方珍怪の物を思うて、これを用ゐ、輿馬、宮室の漸、此より始まり、すくふべからず。」といへり。君子の眼違はずして、遂に振はれずして、亡びたり。天下の主として、象の箸は、わづかなれど、高山も微塵よりなるごとく、終には、民を暴虐し、殷の天下を

○約を以て云々。儉約しては少いの意。

亡ぼすに至る。高下ありといへども、家を興し、家を亡す理は一なり。奢りは、日に長じやすし。恐れ慎むべき事なり。

子曰、「禮は、其奢らんよりは、寧ろ儉せよ。」と。又、「約を以て是を失するものはすくなし。」と。聖人の意味は、深長にして、格別の事なり。しかれども、先儉約に思ひ付かるゝことこそ殊勝なれ。

節奢問答

或學者、某門弟、専ら儉約を用ゐる事を聞き、或時來りて物語のうへ、問うていはく、「聖人の道は、あらそふ事なきを善しとする。然るに、近比、汝は、あらそふことを教ふと聞けり。いかなる事ぞや。」

答、「某教ふるは、聖賢の口眞似なり。争ふことを教ふるとは、何をもつていはれ候や。」

曰、「汝か門弟の中、俄に儉約を用ゐらるゝにより、もしは、身上のもつれにても、あらんやと、心もとなく、「いかなる事ぞ。」と問ひしかば、「師が好む所

○民の心。老
子に「聖人は
常の心なし。
百姓の心を
以て心と爲す。」

なり。」といへり。學者の上にて、約を守るは、常の事なり。しかるを、人にかはり、あはたゞしく行ふゆゑ、争ひおこる。予が思ふは、世間と一同にするが、善かるべし。既に聖人は、民の心を以て心とし、民の好む所をこのみ、民の惡む所をにくみ、民と心を一にしたまふゆゑ、民の父母ともいふ。

今、民のこのむ所は、衣裳に美をつくし、純子、縮緬、綾、錦、鹿子、縫箔類着かざることを、よろこべり。其外、普請等をきれいに作り、諸道具には、蒔繪、鈔梨子地を用ひたり、又喰物は、常々、魚類、鳥類、おほくつかひ、振舞等には、珍味珍物を取あつめ、賑にくらすことをよろこぶ。

尤、これらを法にかなふと、言ふにはあらず。然れども、斯のごとくなり來りし世上なれば、急々にあらたむることあたはず。聖人の民ををさめ給ふは、親の子を養育如く、漸漸を以て治め給ふべし。一軒の家にていはゞ、妻子より小者に至るまで、吾民なり。其民を次第にやすく治むるが、主人の職分なり。先づ人間の樂には、衣食住の三つなり。衣類等を拵へるは、着てたのしむが爲なり。しかるに、自身、着ざるのみならず。妻子小者に至るまで、おさへとゞ

めて、着せざるよし。女童の身にしては、さぞ迷惑におもふべし。是、不便の事にあらずや。

又振舞も、これまでは、一汁、三菜、二汁、五菜の料理にて、客もてなししたるをば、儉約をいひたて、一汁、一菜か、二菜の料理ですますとあり。客人も、是までとは、きれかはりたる不馳走なれば、興なくて、にがしく思ふべし。妻子、家内の者どもは、不興なる躰を見て、心をいため、さぞ氣の毒に思ふべし。門弟中、人にそむき、俄に儉約をなすゆゑ、したしむべき親類、又家内のものまで、争ひに至るは、かなしきにあらずや。是皆、欲心よりなす所なり。前に言ごとく、儉約は、つねのごとく心得るが、學者にあらずや。』

答へて曰、「汝の言ふごとく、儉約は、學者において、つねのことなり。某嘗つて著はす都鄙問答、或人、主人行狀の是非を問ふの段にいひ置きしは、始終、儉約を行ふ事なれど、それと題號なきゆゑ、門弟も心付なかりしに、儉約が常なる事を得心し、此度、改め行へり。それゆゑ、家内のものも、珍しき事と思へるなり。向後、身分相應を知れば、儉約がつねとなる也。」

○つねのごとく、儉約をしてゐるごとく、意

又汝、人間のたのしみは、衣食住の三つといへり。尤、衣食住の三つを樂めども、今日のごとく、おごりたかぶるを以て、樂みとするにあらず。此三つ、人の身にやむ事を得ずして、いとなむことなり。只飢えず、さむからずして、心やすらかに過すを、樂みとす。周禮に曰、「室は、高きにあらざれども、漏らざれば、便ちよし。衣服は、綾羅にあらざれども、和暖なれば、便ちよし。飲食は、珍しき饌にあらざれども、一度飽けば、便ちよし。」といふ。又論語にも、「君子は、食、飽かんことを求むることなく、居、安からんことを求むることなし。」と、のたまへり。此味を知るべし。

扱、妻子や家内の者にあらずひ、思ふやうにさせざるを、不便の事なりといふ。これ、大にあやまてり。汝いふがごとく、家内の者は、我民なり。我民ゆゑ、眞實に愛する也。愛する故に、争ふことを、喻へていはゞ、吾子に灸するが如し。逃まはるを、だましとらへて灸すれば、跳りつ、はねつ、反かへり、「あゝあつや、最早、悪い事しますまい。父様、母様、堪忍して下さりませ。」と、泣さけぶ。親は、涙を流し、齒をくひしばつても、灸する也。是も、あら

○吾子に灸云々。古語に「可愛い子には旅させろ」とあるに同じ。

そひに似たれども、其子の病を治め、無事に養育んが爲なり。妻子、兄弟に、押へ留めて、させざるも、又斯くのごとし。

國、天下も治まらざる時は、あらずひなくんば有るべからず。既に殷の紂王不仁を以て萬民を苦しめ、天下を亂す。周の武王、これをなげき、天下を治めん爲に、仁徳を以てあらずひ給ふ。あらずひは、仁と不仁の二つなれど、遂には不仁を誅し給ふ。こゝにおいて、天下一統、仁に歸す。

今、世間の奢り者を見るに、自ら美服を着るのみか、召つれる女まで、紗綾綸子に縫箔して着するなり。田舎者は、是を見て、御所方か、武家方か、侍のつかぬは不審なりとうたがへり。賤き町家の者として、かやうなる奢りをなし道理にそむく罪人となる。女や子供は、智の味きものなれば、結構成るものさへ着れば、善きこと、おもひ、見るを見まねに、我しらずして、奢に長じ、貴賤、尊卑の禮をみだる。是をとゞめん其爲に、止む事を得ず争ふなり。」

大夫の名言

○愚痴と奢り
愚痴は、おろ
かしく物の道
理のわからぬ
ことなり。ゆ
ゑに奢るの愚
痴と奢りの一
なる所以。小
○手代。番頭
○太夫殿。御
勢と大廟の神
中、下級の神
するもの。屬
官伊

凡て世の有様を見來るに、町家ほど、衰へ安きものはなし。其根源を尋ぬれば、愚痴といふ病なり。其愚痴が、忽ち變じて、奢となる。愚痴と奢と二なれど、分がたきことを語るべし。

或富家の町人、姑、嫁を同道して參宮す。上下三十人ばかりありとかや、小畑の宿にて休み、支配手代は、先達て太夫殿へ案内す。彼思ふは、恐らく此太夫にて、金持の一旦那は、我親方にて有るべしと、慢心顔にて居たりしが、太夫殿出てられければ、彼手代、「此度、後室、奥方兩人共に、參宮いたし候。萬事、宜くお世話頼存する。」と、しさいらしく、口上述べければ、太夫のいはく、「其許は、當地不案内と見ゆ。京、大阪には、町家にも、姑や嫁を、後室の奥のと稱へられ候や。左様成る、上を犯し、奢がましき事は、皇太神宮の邊にては、大なる非禮なり。神は、非禮を受け給はず。此度、參宮せらるゝも、神のめぐみを受けん爲なるに、はるく參宮せられても、神慮に叶はぬは、笑止成る事也。大切成る旦那のことゆゑ、斯くのごとくいふ也。忝くも、茅ぶきの宮作り、三杵米の御供物を受けさせ給ふ、其神慮にかなふ禮法を以て、參宮

案内致すべし。

かやらの事をしらずして、今の世には、奢りに長じ、分をしらず、仕合よく、十軒口か二十軒口の家を持ち、三十人か五十人も暮せば、大きな事と思ふより嫁を御新造の、奥のと稱へさす。都て農工商は、下賤也。其賤しき者として、歴々の武家方と同じやうに、思はるゝこそ愚なれ。その奢たかぶり、上を犯す心にて參宮せば、神罰を受けらるべし。是まで知らざるは、是非なし。向後は、急度慎しまるべきことなり。

又、旦那名よせ帳をみれば、三四十年前迄、京、大阪にて、大金持といはれたる、かくれなき町人も、往方しれぬ者もあり。又、身上衰へ、自炊して暮すもあり。十軒に七八軒は、斯くのごとし。其時に、奥あしらひ、誰にしてもらはんや。『遠き慮なきときは、必ず近きうれひあり。』とは、かやらの類なるべし、夫を笑止に思はれて、物語するぞかし、凡て、貴は貴く、賤は賤く、町家ならば、町家相應の名を呼ぶるべし。相應の名を呼ぶが則ち正直なるゆゑ、皇太神宮も、うけさせ給ふ所なり。』と、竹わるやうにいはれければ、文盲至極

○遠き慮云々
論語にあり。

○竹をわるや
う。何らこた
はる所なく、
率直にいふ事

〇未申。西南
〇丑寅。東北

ばかり也。千日寺の茶店に休みしに、堀江邊より出火すといふ。焼出しとは見えながら、すさまじき火なり。折節、未申の風はげしく、いきほひつよく、丑寅へ吹き付け、黒けぶりの中より爰かしこに火煙みゆ。其勢、たとふべきにあらず。此風にては、たまるまじとて、備後町、油屋何某といふ常宿へ行きみれば、うろたゆる躰也。馴染の事なれば、見捨てがたく、連のうち兩人は、跡に残る。某は、荷物を持せ、『八軒屋にて待つべし。』といひ、別れぬ。

〇八軒屋。大
阪天神橋附
にて、淀川船
の發着所なり

八軒やの濱へ往いて見れば、もはや西本願寺御堂に火かゝり、大風ゆゑ、外のけぶりはさかまく波のごとくなれど、御堂の煙は、二三十間ばかりも立のぼり、すさまじき勢也。

火におはれ、我先にとにげ走るは、蜘蛛の子ちらすごとくにて、老人や子供は負うたり、懐たり、手をひいたり、跡を見かへり、泣きもてにぐるもあり。

〇笑止。俗に
氣毒といふ程
の意。

分きて笑止に見えけるは、二十歳あまりのいやしからぬ女、走つかれて目をまはし、舟の乗場へつれ行き、水をのませて居るもあり。又三十計の女、紫の小袖着て、男のやうに帯刀し、長刀を持ち、素足に草鞋にて、足より血をなが

〇七つ時。午
後四時。

し、下女は、風呂敷づゝみを負ひ、中間と見えしものは、葛籠をかたげたれば助くることもならずと見ゆ。其外、難儀そうなるもの、數をしらず。

七つ時迄に、天満も一面の火と成り、難波橋も焼け、天神橋へも火かゝれり。と見る所へ連の者も來れり。二人ともに、『何成りとも、食はねば、ゆかれぬ。』といへり。さりながら、食と金とつりがへにても、賣る人なければ、是非なく、『ゆかれ次第往くべし。』と、京橋を渡り、片町にて、漸しんこを見あたるかゝる折ともいはずして、二文のしんこは、二文に賣る。げに天下泰平、一統に治まる御代の徳なれや。そのしんこにたすけられて、足軽く守口の宿につき一夜を明すも有がたき。その時分には、大阪に親き者もなかりしゆゑ、未明に立つて歸京せり。

後に聞けば、西の御堂にても、數十人焼死す。船場の中も、爰かしこへ飛火して、一面に火がまはり、焼たてられ、逃ぐる者は、風に木葉を散すがごとし。財寶は取り次第、落せし物は拾ひ次第、只命を惜むばかりにて、我先へとにげゆく。京橋は、人つどひして夥しき人死あり。

其外、四方八方へにぐるもの、橋の落ちたる所は、舟にてわたらんとすれど舟には諸道具を積み置きたり。そのうへ、船頭なれば、渡すべき自由もならず、渡らんとすれば流れて死する者もありと。

數の知れざる死人なれば、子が死し、親は残り。親が死し、子は残り。夫が死し、妻は残り。妻が死し、夫は残り。主人は死し、家來は残るも有るべし。又其中には、知音、ちかづきなければ、貸借もならず、せんかたなく、古郷などへ立のき、さぞ難儀なる者も有るべし。斯くのごとく物語すといへども、我見聞く所ばかりなれば、十分の一にもあるまじ。

又戦國の昔物語を聞けば、押入強盜徘徊し、己が住居も成がたく、他國へにげんとすれば、道にてはぎとり、財寶所持して、逃ぐる事もならず。着のまゝ逃げて、所々にて、弓、鐵砲をかまへ、辭をかけ、『裸に成りてゆけ。』といふ。『着のまゝ也。免せ。』といへば、聞き入れず、『裸になればよし。否といはゞ、打はなす。』といへり。命に代る衣類はなしとて、裸に成りて往し者、數しらずと聞き置けり。

戰國の時、食物や着物が、選み分けてゐらるべきや。虱だらけの物ならて、着ることは成るまじ。其時、木綿布子は重いなど、理窟がいうてゐられうか。おしいたゞいて着るべきぞ。又食物に乏しく、おほくは、つかれるべし。其時に、麥飯や白粥は嫌ひなりといふべきや。食ひくるゝ者あらば、神佛のやうにおもふべし。忝なくも今の御代、天下一統に養ふはありがたき事にあらざるや。

孟子曰、牛羊を野飼する地を、牧地といふ。人に頼まれ、牛や羊を牧ふ者あらんに、必ず野飼の地と草とを求めん。其地と草とを求め得れば、牛羊は、おのづから養はるゝ也。又民を養ふ君を、人牧といふ。今、天下治まる時なれば、己が職分さへ勤むれば、自ら養はるゝは、牛羊を野飼の地に放ち置けば、おのづから養はるゝがごとし。此味を知らず、安樂にくらせば、己が力と思へるは、愚なること甚し。暖に着、飽まで喰ひ、逸居をして、人の道を知らざるは、禽獸に近きぞと、戒しめ給ふなり。

今治まる御代の、廣大なる御高恩報じ奉る事を思ふべし。下賤の者、いかん

○人牧。牧は
牛羊をやしな
ふこと。以て
君の民を比し
君に稱して人
牧といふ。

して、廣大の御高恩報じ奉るべき。報じ奉る事はならずとも、家内一統和合して、一人のごとく、治むるならば、其程の御恩を報じ奉るともいふべきか。世の人、これを思はるべし。』

下の巻

實禮と儉約

或人又問。

「汝、儒書の講釋に、袴を着せざるも、儉約の含あるゆゑ、前方より、ゆるし置かれしと見えたり。然れども、某思ふは、袴は、禮服なり。それを許すは、禮をすつると、言ふものなり。禮をすて、聖人の道は、説かれまじ。天下の事一物として、禮にあらざることなし。曲禮に曰、「道德仁義、禮にあらざればならず。教訓て俗を正すも、禮にあらざれば備はず。争ひを分ち、訟へを辨ふることも、禮にあらざれば決せず。君臣、上下、父子兄弟も、禮にあらざれば

定まらず。」と見えたり。其辨へを教ふるに、禮を捨て、何を教へられ候や。」
答、「曲禮を引かるゝは、面白きことなり。さりながら、汝のいへるは、表一通りにて、袴さへ着れば、禮は調ふと思はるゝと聞ゆ。我言ふ所は、左にあらず。聖人の教を有難く思ふ實あつて、袴を着るは禮なり。實なくして、袴を着るばかりは、禮にあらざ。子夏曰、繪の事は、素より後にす。子夏の曰、禮は後乎。」言は、禮は、必ず忠信を以て質と爲す。是を以て見れば、實は本也。禮は末也。

我許せしは、信心有りても、袴着ては、講釋に出てがたき人の爲なり。豈ぞ儉約にかゝはるべき、隙暇は有りながら、農工商の身として、毎日、袴着て徘徊すれば、隣、近所の人々が、しさいらしく思ふゆゑ、遠慮せねばならぬ也。遠慮のいらぬ旁に、袴無用といふべきや。

兎角、一人なりとも、多く聞せたきが、我願ひなり。固より人は性善なれば、皆君子の筈なり。然れども、聖賢より以下は、私欲あり。私欲ある者は、常人なり。其中に甚だおぼるゝ者は、悪人ともなる。此故に、教へなくんば有るべ

○おぼるゝ者、私欲におぼるゝ者

からず。能く教ふる時は、善人と成り、又甚だおぼるゝ者も、刑罰をのがるゝ常人までには、成やすき所なり。是皆、性善の徳ならずや。故に、孝經、小學などを説き、其意味を知らせ、心を和らげ、上を貴び下をあはれみ、家業の事に怠りなきやうに、教へたき志ゆゑ、和らげ説き候まゝ、老若男女共に、望あらば、無縁のかたぐゝにても、聞かるべし」と、又書付を出せり。

或學者、これを見て、『儒書が、女の耳へ入るものか。めづらしき書付かな。』と譏られしと、告ぐる人あり。其時、某答に、『古の紫式部、清少納言、赤染衛門などを、其學者は、男と思はれ候や。』といひければ告げし人、我言ふ所に同心して、をかしがられき。

此様の事をいはるゝも、近世の學問、多くは、詩作、文章に流れ、聖學の本を失せるゆゑなり。論語學而篇に、『行、餘力あるときは、文を學べ。』と、孔子既にのたまへり。文學は末なり。身の行ひは本なり。凡て學問は、本末を知るを肝要とす。

又國を治むるには、『用を節にして、民を愛す。』とのたまふ。財寶を用ゐる

○紫式部その
他共平安の
朝の媛源氏
式部は清少
物語には枕草
物語は枕草紙
の著あり

○儉約と愛人
老子も、『儉
故に能く廣
し』といへり
廣しは、廣く
人を愛しうる
の意

事、儉約にする中に、人を愛するの理、備はれり。人を愛せんと欲すとも、財用たらざれば能はず。しかれば、家國を治むるには、儉約は本なる事、明なり。これまで、物語すといへども、汝、いまだ不得心と見ゆ。幸、今般、門弟、儉約示し合の書付を認め、其序を予に請はれけれど、『先づ何れもの存じより述べられよ。』といへば、斯くのごとくとて、書付け見せられけり、趣意、予が心に合ふ。これ約にして、見やすかるべし。此序を見て、儉約の意味を考へ知らるべし。

儉約序

伏て惟々みるに、御代の泰平、目出度治まる事、上は貴く、下は賤く、尊卑の位まし、有がたくも、孝を鬼神に致め、飲食、衣服、宮室の類は、薄くなし、儉を用ゐたまひ、恵みを萬邦に垂んと、御力を盡し給ふ。至徳光輝、普くあらはれ、すゑが末まで安穩に、照し給はぬ里もなし。

實に、徒然草にも、『世を治むる道は、儉約を本とす。』といへり。蓋し儉約と言ふ事世に多く誤り、吝き事と心得たる人あり。左にはあらず、儉

○孔子鬼神に
は、吾れこと
然す飲食を
す鬼神に致
衣服を惡し
冕に致し美
寶を卑し溝
力を溝に盡
せりと

○閭巷の區々
村落の隅々ま

齊家論

三五四

約は、財寶を節く用ゐ、我分限に應じ、過不及なく、物の費え捨る事をいとひ、時にあたり、法にかなふやうに、用ゆる事成るべし。

それ、天下安穩に治まり、有がたく忝けなき事をあげていはゞ、財寶は、數千里のあなたより、數千里のこなたへ取通し、舟路、陸路、海賊、山賊の患ひも知らず、近くは、閭巷の區々まで、我家に安居して、士農工商、おのれが業に心をいれるれば、何の不自由なきやうにとの御仁政、上は申すも恐れあり、それ所々に、司、位にましくて、日々夜々に怠らず、是を治めたまはり、又家業の際ある折は、月花のたのしみも、心にまかせ、且、志あれば、聖人の道を學び、貧福ともに天命なれば、此身このまゝにて足ることの教をさく。此國恩の大なる事、天地のごとくにして、中々筆にも盡すまじ。

下として、無道、放逸をなし、上を犯し、我分限を知らず、身をおごり人のいたみをしらざるは、悲しき事かな。さある人は、天罰、のがる、事有るまじ。今誠に目覺むる心地して、國恩をあふぎ奉り、先非を悔むぬ。

○吝きと儉約
貝原益軒の曰く、己に薄きを儉約とし、人を薄きを吝とす。

これ、教を受くる益ならんか。

扱、此御高恩、いかにして報じ奉るべきや、明かには知らねども、我身をさめ、上を犯すことなきやうに慎み、父子、夫婦、親類、縁者、家の小者に至るまで、たがひに睦しく打和らぎ、吝きことなく、儉約を守り、一人の小者、又は出入、従ふ者をあはれみ、助けたき志なり。

これまでも、一家親み、又人を恵むこと、元來、きらふにあらねども、第一、自身のおごりつよく、費おほきゆゑ、人を恵む仁愛の心も、外に成り行きぬ。親しき親類の疎に成るも、かの奢ゆゑ、一家の出會も、物毎造作に、料理などもあもくなくなり、度々の出會もなく、遠々敷成りぬ。これを以てみれば、奢は、不仁の本となる。恐れつゝしむべし。

今より後、常の出會は、茶漬飯、ひたし物などにて、木綿衣類なれば、おのづから心やすく、度々出會ひ、親き上にもしたしくなり。且親類は言ふに及ばず、宿持手出入の人々迄、若し身上不如意なる者あらば、其譯を聞き届け、不實ならざることならば、何分、力を合せ救ふべし。又家内

○宿持手代。
通ひ番頭。但番頭の下にあ

を恵むにも、先づ木綿衣類なれば、あたらしく仕かへるにも、心やすく、古き物は、仕着の外に、見合せてつかはし、仕着の新しき物は、貯へおかすやうに仕なし、又半季、一季の者は、纒ワツカの給銀を取り、布子一重を拵ゆれば、残りすくなになり、鼻紙代はながみしろも不自由にて、甚だ不便の事也。たとへ盆、正月に、百二百の錢ぜに、又履ものなどつかはしても、これらにて、足るべしとも、思はれず。尤も家により、奉公人により、高下次第かうげも有るべけれど、すべて是に准ずべし。夫故、たまかにつとむる者には、折々の心付致すべき事也。

扱又、世間に、人をつかふに、定さだめの仕着や給銀さへ渡しぬれば、事すむやうにおもひ、其外に心を付くる人まれなり。奉公に出る人、親もと不自由ならざる人もあれど、多くは、親里まづしきゆゑ、奉公にも出す。親もと豊ゆたかなれば、乳母うほをも添へ、養ひ育つる事也。然れども、貧しきゆゑ、親の手をはなし、遙々はるか、奉公に出すものなれば、さぞかなしく、不便に思ふべけれど、是は助けたきとて、いかんがすべき。又たすくれば、助けら

○たまか。儉約。

るゝ事は、たすけたき事也。總て、田舎出奉公人は、布子一、かたびら一重あれば、事足りぬと思へり。然れども、半季か一季過ぐれば、傍輩ぼうはいの衣類多く有るを見て、羨敷うらみましくおもひ、不自由成る親本おやもとへいひやれば、親は、聞くより不便に思ひ、借金して成りとも、一つづゝも、こしらえのぼせ、最早能きかと思へば、又たらぬものをいひやれば、拵つとめる事は成りがたく、のぼさねば、子供が不便なり。いかゞして成りとも、のぼしたく思ひ、なやみ煩わづふ者多く、いたましき事なり。かやうの類は心を付け助ければ、なる事也。夫故、貧しき親、兄弟に、其苦勞をさせざるやうに、いたしたき志なり。

元來、今般このたびの儉約は、上を恐れ、己おのれが賤いやしきことを知り、約を守り、萬分の一なりとも、禮義を守らば、おのづから、親類は、いよいよ睦く、家内の者には、親、兄弟の勞をのがれさせ、出入の人々には、惠みの端とも成り、子としては、先祖、父母への孝となり、おのづから、上を恐るる恭順の道ともならんか。

四民即一心

或人曰、

『門人方、儉約の序文をみれば、町家相應にては面白し。しかれども、町家ばかりの儉約にて、大道の用にたらず。同じくは、世間一同に用ゐるやうに、教へらるゝが、よかるべしと思へり。汝の門人には、武士方もありと聞けり。此等の教はいかん。』

答、『汝は、町家のことは、瑣細にて大道に用ゐられずと云ふ。某思ふは、左にあらず、上より下に至り、職分は異なれども、理は一なり。儉約の事を得心し、行ふときは、家とのひ、國治まり、天下平なり。これ、大道にあらずや。儉約をいふは、畢竟、身を修め家をととのへん爲也。大學に所謂、「天子より、以て庶人に至るまで、一に是、皆身を修むるを以て本とす。』と。身を修むるに何んぞ士農工商のかはりあらん。

○稀米。米粒の小さきもの。

身を修むる主となるは如何。これ心なり。此身の微なるを喩へていはゞ、大

倉に稀米一粒あるがごとし。しかれども、天地人の三才となるは、唯心のみ。古今、たれか此心なからん。然れども、是を知る者まれなり。知るといへども其通を行ふ者、甚かたし。惟り君子は、誠を存じ、克く思ひ、克く敬し、天君泰然にして、百體、令に従ふ。學ばざる者は、見聞く所の欲にひかれ、固有せし、仁心を見失ひ、これを求むる事をしらず。知らざれば、ことごとく不仁となる。不仁となるものを、放心といふ。尤、色心は、愛より來るといへども、過ぐれば忽ち不仁となる。

まづ、放心の一二を擧ていはゞ、名聞と、利欲と、色欲なり。衆人は、たとひ、少々の善事をなせども、己を他より譽められたく思ふ心よりする善事なれば、實の善事にあらず。其外、身上の事、氏、系圖の事、或は藝能、智恵に至るまで、己相應より宜しく思はれたき心有るは、皆名聞也。又利欲といふは、道なくして、金銀、財寶をふやす事を好むより、心が闇く成りて、金銀有るがうへにも、溜めたく思ひ、種々の謀をなし、世の苦みをかへりみず。剩へ、親子、兄弟、親類まで、不和に成り、たがひに恨みをふくむに至る。又色欲と

○しなかた
のみ云々。容
貌等のい、者
の心を愛し。

いふは、若き時は、前後のわきまへもなく、しなかたにのみめて、爰かと思へばかしてにわたり、流の女にさへ、心を見すかざるれど、夫をもしらず、親のゆるさぬ金銀をつかふ、又老いたる人も、夫婦諸とも、道にも入るべき時、腰本や下女に手をかけ、又はわかき女を抱へ寵愛し、親しむべき女房には疎く成り、頭には白髪をいたゞく事をしらず。榮耀榮花のおごりのために、こゝろを悩ますこと、はなはだし。其外、萬事、不義無道をなし、心を煩すは、皆放心を以てなり。

此味を知らず、仁に心を盡さざるは、かなしき事かな。聖賢、これを歎き給ひ、「學問の道、他なし。その放心を求むるのみ。」と、孟子も既に説きたまへり予教ふる所も、これによれり。孟子開き示す所、至つて重きことなれば、容易ことにあらず。しかれども、執行の功により、放心を求め得ることあり。求むるときは、心の一致なることを知る。

故に、士農工商、ちのく職分異なれども、一理を會得するゆゑ、士の道をしへば、農工商に通ひ、農工商の道をしへば、士に通ふ。なんぞ四民の儉約を

○心の一致。
士農工商の別
なく、其の心
は一に歸す。

別々に説くべきや。

正直の徳

儉約をいふは、他の儀にあらず、生れながらの正直にかへし度爲なり。天より生民を降すなれば、萬民は、ことごとく天の子なり。故に、人は、一箇の小天地なり。小天地ゆゑ、本、私欲なきもの也。このゆゑに、我物は我物、人の物は人の物、貸したる物はうけとり、借りたる物は返し、毛すぢほども私なくありべかゝりにするは、正直なる所也。

此正直行はるれば、世間一同に和合し、四海の中、皆兄弟のごとし。我願ふ所は、人々こゝに至らしめんため也。分けて士は、政のたすけをなし、農工商の頭なれば、清潔にして、正直なるべし。もし私欲あらば、其所は常闇なり。又農工商も、家の主は、家内の頭なり。もし私欲あらば、家内が常闇となる。すべて物の頭となるものは、慎しむべき事也。

然るに、欲心に蔽はれ、此正直を行はずして、あさましき交りになり行くは

○ありべか
り。曲れると
ころなく凡て
あるべきやう
に自然のまゝ
にする事。

かなしき事也。故に十五年はんごのかた以來、其私欲を離るゝ事を説き來れり。私欲ほど世に害をなすものはあらじ。此味を知らずしてなす儉約は、皆吝みけしほに至り、害をなすこと甚し。我いふ所は、正直よりなす儉約なれば、人を助くるに至る。子しのたまはく曰、「人の生けるは直也。罔しひて生けるは、幸にして免れたり。」と、のたまへり。これを以てみれば、不直にして生けるといへども、死人に同じ。恐るべき事なり。

それにつき、去春、或人、關東洪水の事によつて、問はれし事あり。予返答せし趣、物語すべし。或人の問にいはく、「何れも方は、際きはの拂も、例年の通とほり、首尾よく仕舞ひ、正月を祝はる。某も、人に遇へば先もつて御慶といへば、先方かたよりも、御無事に重年、目出度といふ。しかれども、我心苦しければ、一切目出度なし。所以は、去年、關東の洪水に、我藏のごとくに思ひし三軒の得意は、家財より田畑まで流され、身がらほうく、命助かりしばかりなり。依つて當分の見舞に、金二十兩あまり、つかはしければ、やうくと、飢は助かりあらるゝ也。然れども、賣場もことごとく流れたれば、中々、商ひの段にては

○際きはの拂。年末即ち暮の支拂。

○仕合せ。出來事。

○柔弱。意志薄弱。

なく、これまでの賣掛を取あつめ、のぼさるゝは、今年共、來年とも、其限りは、しりがたし。此仕合せこのしあはせに、際きは拂ひもならず、借金を濟すまさんとすれば、家財まで賣拂ひ、赤裸に成るなれば、是も又、成がたき事也、日比ひごと、汝の物語を聞くに、難儀の所にて、心を惱さぬが、學問のちからなりといへり。かゝ時、いかにして、心をなやまさず、御慶目出度祝はるべきや。』答、「某いふ通り、そむかず用ゐらるゝならば、いと心やすき事也。望の通り、萬々歳を祝ふべし。祝ふといふは、他の儀にあらず。正直を守ることなり。正直を守らんと思はゞ先づ名聞利欲を離るべし。然れども、柔弱にては、はなれがたく、名利のころは發おこるべし。發るとも、一生行はざれば、扱あつかも、正直者なりと、天下の人よろこぶべし。天下の人に悦ばるゝほど、目出たきことあるまじと思へり。いかに。』或人曰、「正直者といはるゝは、誰も望む所也。しかれども、借方を濟す事は、いかゞすべき。』答、「汝、世間の者に、よろこばるゝは、誰も望む所といふ。喜ばるゝが望みならば、家財残らず賣拂ひ、赤裸になり、借金を濟さるべし。ことごとく濟されなば、今の世に、たぐひ稀なる正直ものと、世舉つてよ

○託宣。神靈の
人に託りて
宣ふ事。

○負せ方。債
権者。

○散錢。賽錢
の邪知者。今
の三百代言の
類。○あつかひ
か。債権者に
談判し。

ろこぶべし。其正直と、又神の正直と、正直に二品あるべきや。其正直が通る
ならば、汝も直に、大神宮の末社同前也。既に比咩大明神の御託宣に

天にならひ地にうけたりし人心まがらざりせばすなはちの神

とあり。此意味を得心せば、身上有つ切賣拂ひ、借金皆濟せらるべし。其とき
負せ方の心を推していはゞ、誰も、かくさつぱりと、裸には成りがたきことな
るに、扱正直成る仕かた哉と、汝が心に感ずべし。

たとへていはゞ、人の生れし時に、裸なり、しかれども、裸て凍えし赤子も
なし。無智無欲成るものなれど、先づ産着とて着せる也。親が着するのみなら
ず、親類まで持寄り着せる也。人の心は、自然に慈悲、正直成る所あれば、汝
の裸になられし其日より、感心せし負せ方が、寄集りて着すべし。左はいへど
何程の財寶が集まるべしとは、知りがたし。正直よりあつまる財寶なれば、神
に捧ぐる散錢のごとし。

しかるに、世間に、此貴まるゝ事を嫌ひ、私欲をもつて、邪知者を頼み、相
談せば、何程の借金有りと、二三步通りより、あつかひかけ、辯舌を以てい

ひまはさば、四五歩どほりにては濟むべし。少し成りとも、おほく残すを、手
がらとし、其残る金銀を我物と思ひ、人をだます事を所作とするは、俗にいふ
餽盗人といふ者なり。

○依怙。偏端
な愛。

「謀計は、眼前の利潤たりといへども、必ず神明の罰に當る。正直は、一旦の
依怙にあらずといへども、終に日月の憐を蒙る。」とは、皇太神宮の寶勅なり。
神の罪人とならば、居所はあるまじ。廣き世界に住み得ずして、狭き住居する
は、かなしき事なり。

ひろき世界に住み得ずして、せばき住居するといふは、土地のことにてはな
し。廣大なる心を、微塵のごとくなして、くるしむことを云ふ。又正直を行ひ
心に恥づることなければ、限りなき天下の廣居に居て、深長なるたのしみある
ことなり。我教ふる所は、其餽盗人の難を遁れさせ、正直者といはせ、鏡のご
とき神明の御心に、かなふやうにならるゝは、目出度祝ひにあらずや。」と云ふ

惻隱の情

或人又曰、『汝いふ所の儉約は、正直が本なる事をいひ、且常にも、正直を第一に教へらるゝにつき或人へ答へられし物語、一通り聞えたり。汝、所存の通赤裸と成つても、正直を用ゐる志しに候や。しかれば、論語に、葉公、孔子に謂つて曰、『吾黨に、躬を直くする者あり。其父、羊を掠む。然るを、子、これを證はす。』とあり。父が悪事にても、隠さずあらはすは、ありべかかりの正直なり。又前にひかるゝ御神託に、『天にならひ地にうけたりし人心まがらざりせばすなはちの神。』とあり。天地は、見えし通り明らかなるものにして、隠す所なし。

汝がいふ所も、かくす事なく、ありべかかりの正直なれば、御神託に同じうして、眞直也。然れば、汝がいふ所は、神道の上の事なるべし。某思ふは、左にあらず。總べて世間の事汝がいふごとく、さつぱりと裸には成がたき所あり故に、孔子も、葉公にこたへて曰、『吾黨の直き者は、これに異なり。父は、子の爲に隠し、子は、父の爲に隠す。直き事、其中にあり。』と、のたまへり。汝も、我も、同じく儒書を學びながら、かやうに相違あるはいかん。』答、『此御歌

○實情。衷心よりおこる實情。

○間に髪を入れず。實に瞬間的事であるの意。惻隱の情はしく思ふ情。

○常人。凡人

は、人々、天地に受けたる心を、直に用ゐるときは、即ち神なることを、しらせ給ふ所也。汝は、父が悪事を證はす悪人を、反りて正直者と思ひ、御神託と同じやうに見なすは、理に聞きゆゑ、是非わかれず。

彼が不善を知らんと思はゞ、實情を知るべし。實情の發る處をいはゞ、こゝに人あらんに、その父、人を殺さば、はつと驚くは、子の常なり。又、父が羊を掠みしと聞くとさきはつと驚く情發るは、鏡に物の移り、形に影のそふがごとく、間に髪を入れず。此所にて豈ぞ直不直を論ぜんや。これ、惻隱の情にて實情なり。

常人は、勝手にひかれ、思慮おほく、其意に思ふは、此事人が知るべきか。定めて知るべし。隠し課することはなるまじ。逆も隠されぬことならば、人にはれぬ前に、我よりいふが罪もかろくて然るべしと思ひ、父の悪事をあらはすは、己を思ふ所より、父を捨つるに至る不孝ものにて、大悪人なり。

汝、博學なれども、理に聞きゆゑ、思慮と實情分れがたく、固より論語が解けぬ所より、神道、儒道に高下を見なすは、笑止なることなり。既に孟子に云

ふ、「上世、嘗て、其親を葬らざることあり。其親死する時、擧げてこれを谿に委つ。他の日、これを過ぐる時、狐狸、これを喰ひ、蠅、蚋、これを喰ふ。子が額より、汗流れ、睨に見て視ず。それ泚すること、人の爲に泚するにあらず。中心より面目に達するものなり。」と。是即ち、惻隱の心なり。

○瞽叟。舜時代の人。舜時

予は、此惻隱の心發る所を、そのまま直に行ふを、正直といふ。舜の大聖人といへども瞽叟、人を殺さば善惡をえらまず、負うてのがれて、隠れ給ふべしと、孟子ものたまふ所也。聖賢の説きたまふ惻隱の情は、直に真心なり。思うて得るにあらず。勉めて中るにあらず。天理の自然なり。程子の所謂、聖人の心は、明鏡止水のごとく、四方八方を照し給ふ。

○八咫鏡。三種の神器の一。○乾坤。天地

又神道にて、八咫鏡と申し奉るは、直に天照大神宮の御心にて、天が下あらんかざりを照らさせたまふ、神聖の御心斯くのごとし。一塵もとゞめぬ御心にて、乾坤を貫きたまふ、これ明なりといはんや。直なりといはんや。又正しさといはんや。年月を重ね、黙して識るべき所也。

予云ふ儉約は、只衣服財器の事のみにあらず。總て私曲なく、心を正しうす

るやうに教へたき志なり。退いて工有るべし。尤も、言ふ所は、質朴にして野鄙ならん。しかれども、文質相かぬることは、大賢以上のことにて、天に楷て、昇るがごとし。いふも中々愚なり。

齊家論終

○升落し。鼠を捕へる仕掛を以て、一端を棒で支へ、内におに餅を入れたらば、鼠を引寄せ、おちて捕へる。其の他、澤山あり

○ひな。田舎

○沽却。賣り果す事。

は家を亡す畏と知りつゝ、奢り、利欲は禍を招く畏と知りつゝ、其畏に掛つて苦しむ人あり。升落しの鼠、鹽落しの雀、釣針にかゝる魚などは、皆是、生を養はんとて、畏に掛かる。それさへ人は、愚かなるものにいふ。其人々の掛る畏は、あながち、身過ぎといふにもあらず。明日といふ畏にかゝつて、今日をむなしうする人もあり。毒と知りつゝ、畏に掛つて、酔狂ひするもあり。かやうなる畏盡し、算へて行けば、日もはや足らじ。

就中、貴も賤も、ひなも都も、唯かゝり安きは色の畏、此畏に掛り、國家を亡し、身を失なひし、むかしの事は、和漢の書に、數多見えたり。これは先づ置き、翁、目前見聞きたる、町家の人の、畏と知りつゝ、畏にかゝり、家を失ひ、身をうしなひ、名跡の絶たる類ひ、指を折るにいとまなし。歴きとした家の主、此畏にかゝつて、身を持崩し、終に金の耗と、水の耗とが病根にて、若死せられし人もあり。此畏にかゝつては、其身正しからざるゆゑ、内徒の者まで、放埒になり、いろくの畏にかゝり、數代の家を沽却して、親兄弟に難儀を掛け、妻子に憂目見せる族、翁毎々承はる。

○親の遺體。即ち父母の遺體なり。

扱また息子や手代どもの、此色の畏にかゝり、主親に勘氣を受けたり、駈落したり、果は乞食非人となり、のたれ死をしたるもあり。親の遺體に疵をつけあらぬ死をして、親一類の顔を穢し、はぢに恥をさらせしもあり。兎に角恐るべきは、色の畏なり。

人の相

客一人出て曰、「某今朝、去る名高き人相見に出會ひしが、彼相者、予を相して、婦人の災難にあふべき相あり。慎み給へと言ひき。我曾つて、婦人の難にかゝるべき覺えなし。もし相知りたる女あらば、慎みもせめ、本よりなき婦人の災難、恐るゝに足らず。是等も相者といふべきか。御考へ給はるべし。」翁の曰く、「其言葉、既に災難顯はれたり。慎むべし、おそるべし、昔久米の仙人の通を失ひ、落ちられしも、どこぞに、白い脛はないか。通を失ひたいものじや。もの洗ふ女は居ぬか、落ちたいものじやと、覗き廻つて見たてはない。百夜通ひし、深草の少將も、はじめはちよつと見たばかり、後には戀の奴と成る。其

いまだ見ざる所を慎み、其いまだ聞かざる所をおそるべし。

先年、或高名の相者なる人、翁にかたりし事あり。其相者、元日未明に、北野の社に詣てんとて、干本通りを上りけるが、むかふより、遽しく來る人あり。提灯にすかし見るに貧窮患難、死相亦顯はれたり。いかなるゆゑぞと問ふ間なく、別れけるが、此人の相、何となく心に掛り、もし逢ふ事のありもやせんと又干本通りを下向す。東方既に明の春、空の氣色も長閑なる人品にて、向ふより來れる人、温順にして君子の相あり。よくく見るに、彼未明に逢ひし死相の人なり。須臾に相のかはりたる不思議さに、「いか成る人にてましますぞ。嚮に未明に逢ひしときは、困窮の相有つて、死相すでに顯はれたり。今また君の相を見るに、福德充滿、長壽また限りなし。是我未熟の見過りたる所なるか。

○肺肝を見る
大學に「人の
已れを視るこ
と、その肺肝
を見るが如
し。」とあつて
心の奥を見抜
くこと。

但し君、神術有つて、斯の如く變ぜしむるか。不審を晴させ給へ。」といへば、彼人手を打ち、「嗚呼、妙なるかなく、其肺肝を見るがごとし。我本、何某といふ朋友ありしが、名は憚りてまをさぬなり。彼舊友、七年已前、火災に會ひ貧窮におよべるを、見るにしのびず、我、財を分けて賑はす。去秋、われまた

水難にあひ、困窮におよべども、彼朋友の信なきのみにあらず、予が災難を幸に、おのれが利欲をほしいまゝにし、剩我を科におとさんと謀る。彼是の恨、骨髓に透り、かの朋友を刺殺し、我もともに死ぬる存念、九寸五分を懐にし、かの家さして行く途中、思ひ内にあれば、色外に顯はれて、困窮の相見えざらんや。死相また、あらはれざらんや。討はたすかくごにて、未明に彼の何某の家に至り、しのび入りて窺ふに、何某ははや禮服にて、老母に屠蘇を進むる體只ひと刺と近よりしが、老母の面ざし、我亡母に彷彿たり。覺えず劔をとりおとし、過さり給ひし母の教訓、目前きく心地して、惣身より汗流れ、いかりの煽忽きえ、はじめて知る我身の非、今我、かれを殺害せば、老母悲みに堪えずして、命もまた危からん。假令命全くとも、たれ有つて養はん。其子には恨ありとも、老母に何のうらみか有る、恨なき人を害せんは、大いなる不仁なり。足る事を知らずして、困窮せしは我過り、一朝のいかりに、其身をわすれ、父母の遺體を毀ひやぶり、父母の名まで汚さん事、不孝これより大なるものはあらじと、過を改めて歸りしが、内の誠、外にあらはれ、君子の相に見えけるは

○靜謐。天下泰平。○わごぜ。御前に用ゐる代名詞、あなたそなたの意。

○かひ桶。馬のかひ桶。○龍骨車。水田の一種。○零。早の續。○時雨。降ること。○祈願。こめ

○御湯立。熱湯を身にもそそぎ。○時に意。○五日。十日。○吹。風。○五。雨。○ひ。時。に。順。ふ。也。

桂馬とび、無拍子ながら、口まねいたさん。彼老人居住ひを直して、曰、下々の口から澤山さうに、申すも近頃御慮外ながら、天下太平、五穀成就、民安全とは今此時、何ひとつとして、不足なき世の中、堯舜の代といふとも、かほど目出度、御静謐成る御代は有るまい。すゑすゑのわごぜや、我等に至るまで、親子、夫婦、一所に居て、なんの氣遣ひのきの字もなく、安樂世界に暮す事、是皆泰平の御蔭ならずや。餘り廣大なる恩澤は、ひとくく左程に思はぬものじや。嗚呼、太平なる人心。

扱又、わごぜ達は知るまいが、何國の在所も同じ事、夏の頃早つゞけば、百姓の辛苦辛勞、いやはや、京の衆にも、ちつと見せたい。親も、子も、夫も、婦も、嫁も、娘も、夜晝のわかちなく、命限り、根かぎり、かひ桶の、龍骨車の、桔槔の、すつぽんのと、眞黒になつて水の世話、少しにても、ゆだんすれば、折角これまで辛苦した、稲も、綿も、粟も、稗も、大豆も、小豆も、からしてのける。もう二三日早つゞけば、たとへいかほど、はたらいても、最早引くべき水も盡き、人の力も弱るとき、神く諸寺の祈念祈禱、零の奇特とて、

俄に雲にしが出來、大雨頻にふり出せば、其悦び類ひなく、蘇りたるごとくにて、今まで有りつる水の喧嘩も、さつぱりとながれて仕舞ひ、御神酒上げるの、御湯立の、御禮まゐりの、御蔭のと、村々の雨悦び。

此やうな早年は、五年目か十年目、度々はない事じや。常のとは、時に順ひ、雨も程よう降る故に、辛苦も數少く、五穀も出来る。此年は猶以て、悦ぶべき筈なれども、是がかの大病人の本復して、本復の祝ひはすれども、病ぬ祝ひとて、祝ひする人なきがごとく零して雨の降るをば、有がたがれども、程ようほどよう降る雨をば、左程まで、ありがたがらぬ。この御治世の有がたきをさほどまで、ありがたがらぬも、亂世の悲しみを、知らざるゆゑなり。

もつとも、天恩國恩は、廣大なる事なれば、報じやうはなけれども、責めて天の冥加をおもひ、御法度をかたく守り、正直に家業をつとめ、第一に奢を慎しみ、困窮なる人あらば、相應の助をせられよ。其元が先祖の次郎吉は、唾壺の掃除から組立て、此やうなる家藏、掛屋敷まで儲出し、内福に有つたれども、一生、菜好みせず、着るものに難癖言はず、奢りをつゝしみ儉約をまもり

